

516  
357

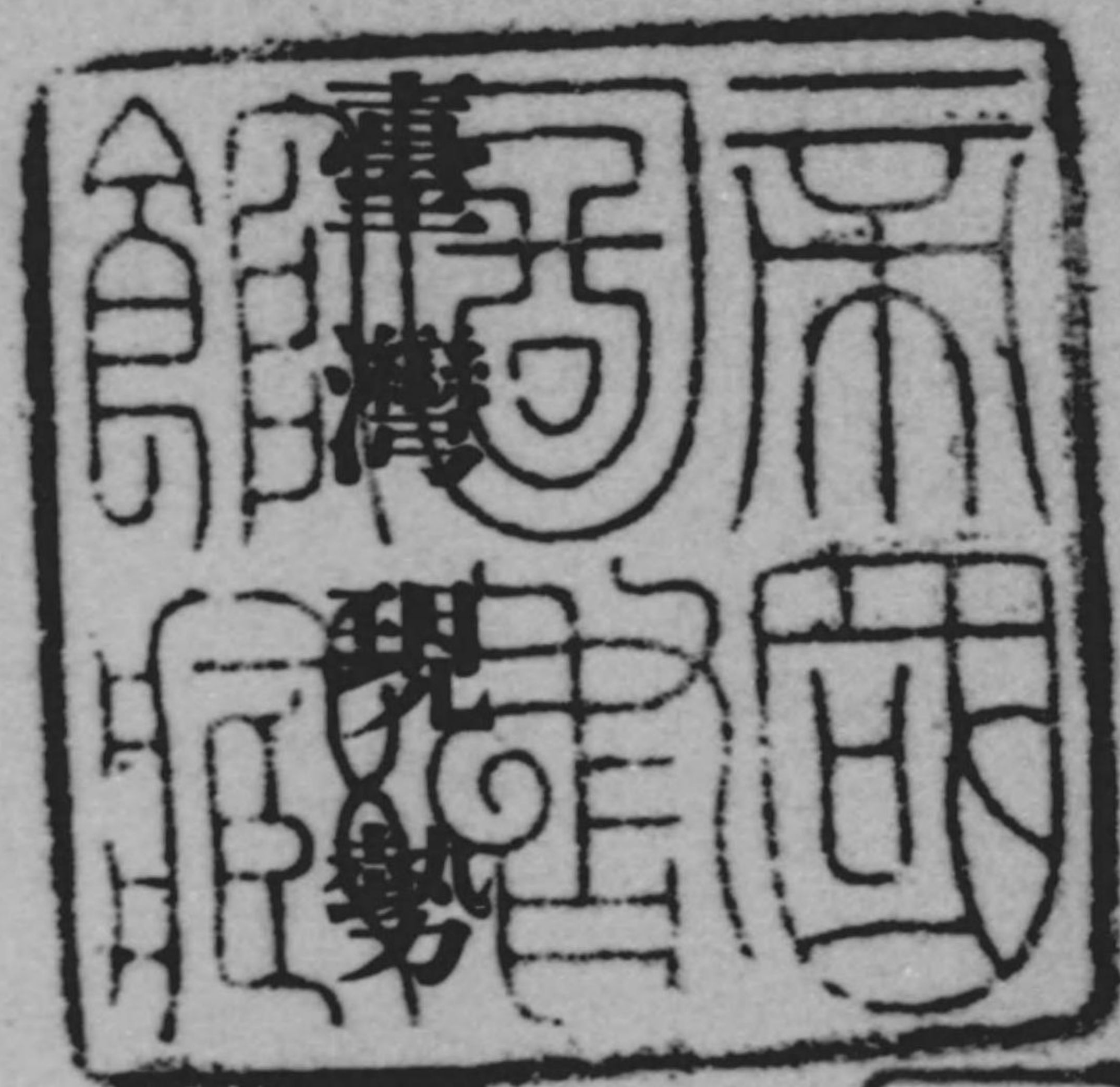
現勢要覽

昭和九年版

100-015

臺灣現勢要覽

昭和九年版



要覽

發行所二結本



516-357

### 凡 例

- 一 本書は本島の現勢を知るの便に資せんが爲め、主要なる事項に就き其の統計的説明を試みたるものなり。
- 二 本書は昭和七年の事實を基礎としたるも最近の統計あるものは努めて之を探り、又昭和七年の事實不明のもの若くは特に必要ありと認めたるものは昭和七年以前の事實をも掲せり。
- 三 本書は特にその變遷消長を窺ひ既往との比較の便に供せんが爲め、必要なる事項に就きては沿革及累年の事實をも掲せり。
- 四 本書は帝國に於ける本島の地位を説明するの便に供せんが爲め、其の必要なる事項に就きては内地、朝鮮、樺太、關東州等との比較對照をも試みたり。

昭和九年五月

臺灣總督府

# 目次概覽

## 統計圖表

一	臺灣の沿革	一
二	位置	五
三	面積及土地	九
四	山嶽	一五
五	河川	一九
六	氣象	二二
七	人口	二七
八	行政	三九
九	警察官署及職員	四三
一〇	農業	四九
一一	畜産	五九
一二	林産	七一
一三	礦産	七三
一四	水産	七五

一五	工業	七九
一六	糖業	八一
一七	貿易	八三
一八	財政	一〇三
一九	專賣	一三三
二〇	金融	一三七
二一	學事	一三二
二二	衛生	一三九
二三	水利	一三九
二四	鐵道	一四二
二五	郵便、電信及電話	一四三
二六	職員及俸給	一四六
二七	最近廿一箇年の趨勢概覽	一四九
附	錄	

目次

七	六五四	三二一	統計表
人口	氣象	位置	I 人口密度
三 暴風	一 氣溫	面積及土地	II 鐵道營業線路
二 降水量	河川	一 總面積比較	
一 氣象	山嶽	二 州及廳の面積	
	土	三 地	
七	三	二	一
七	五	二	一
五	三	〇	九
三	二	九	九
二	九	五	五
二	五	三	一

一	總人口	二七
二	州及廳の人口	二六
三	主要都市人口	二六
四	蕃社戸口	二五
五	在留外國人	二五
六	國勢調査	二七
七	本籍別内地人	四〇
八	在外本島人	四〇
九	失業業者	四〇
一〇	人口の増加	四七
一一	婚姻、離婚、出生及死亡	五〇
一二	出生率	五三
一三	死亡率	五三
八	行政	五九
一	行政區劃	五九
二	行政區劃の沿革	六〇
一九	警察官署及職員	六三
一〇九	農業	六五
一	農業戸數	六五

二	耕地面積	六六
三	農産	六六
二一	畜産	六九
二二	林産	七一
二三	礦産	七三
二四	水産	七五
二五	工業	七九
二六	糖業	八一
二七	貿易	八三
一	貿易總覽	八三
二	對手國別外國貿易	八八
三	中華民國、香港及南洋貿易	九一
四	重要品別外國貿易	九四
五	重要品別内地貿易	九六
六	港別貿易	一〇〇
一八	財政	一〇三
一	總督府財政	一〇三
二	地方財政	一〇七
一九	專賣	一一三

二〇	金融	二七
一	幣制	二七
二	銀行	二七
三	其の他の金融機關	二八
四	物價	二九
二	學事	三二
一	教育概覽	三二
二	社會教育	三五
三	國語を解する本島人	三七
三	衛生	三九
一	衛生機關	三九
二	水道	三〇
三	地方病	三一
四	阿片	三四
三	水利	三九
二四	鐵道	四一
二五	郵便、電信及電話	四一
二六	職員及俸給	四六
二七	最近二十一年間の趨勢概覽	四九

附錄

一	帝國國富總額	一五三
二	國債及借入金	一五九
三	海外在留本邦人	一六一
四	内地都市人口	一六五

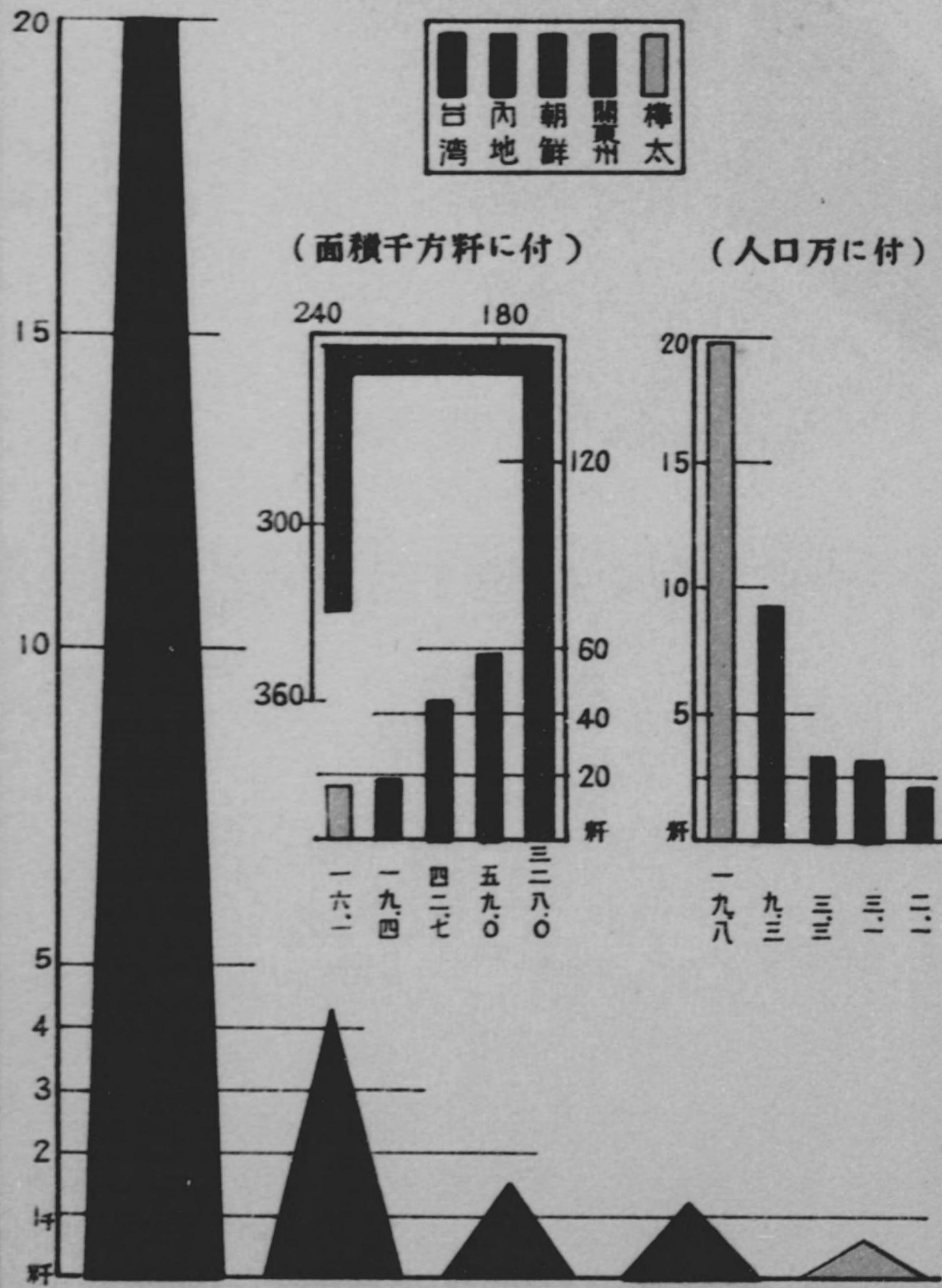
(以上)





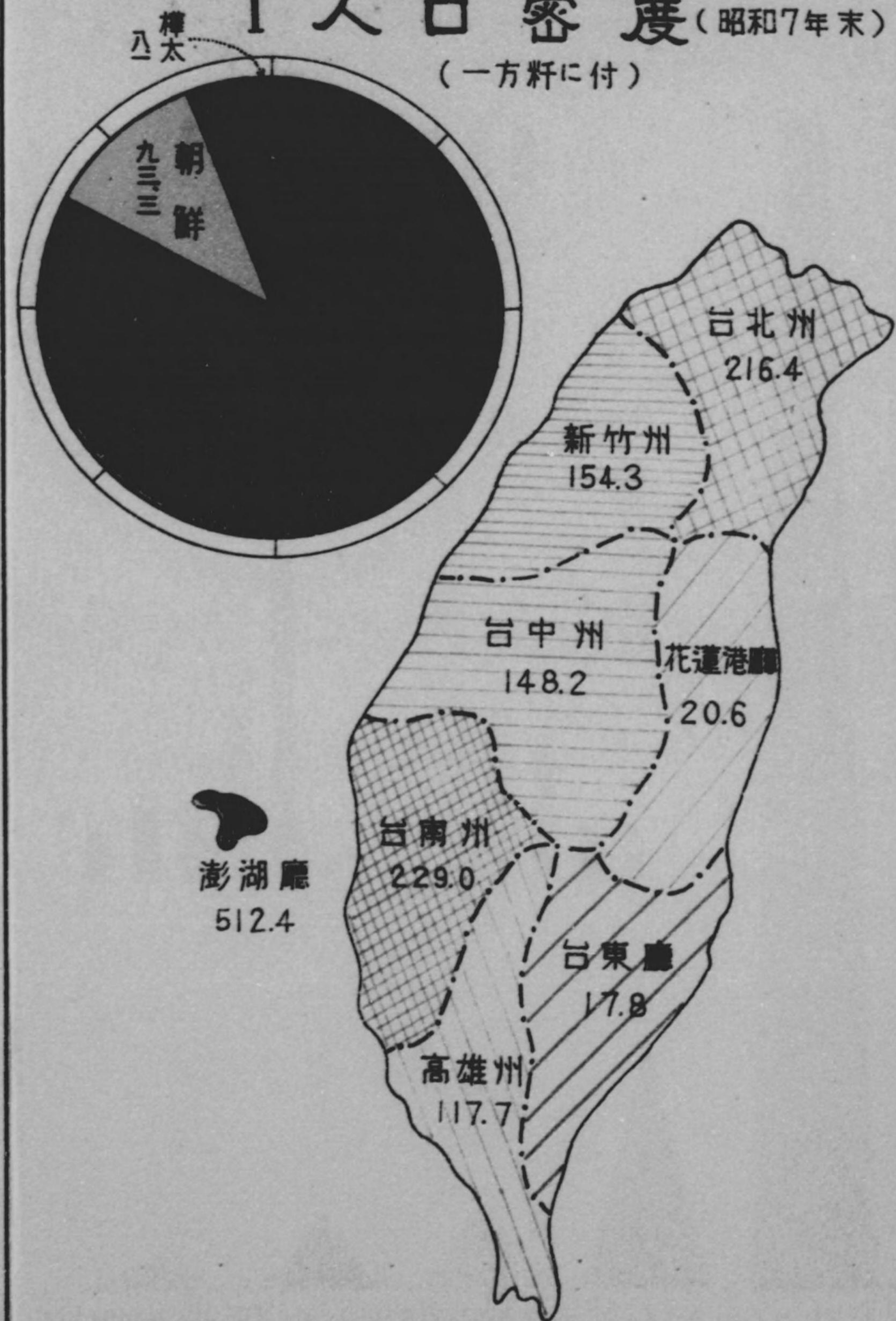
## II 鐵道營業線路 (昭和7年度末)

(地方鐵道を含む)



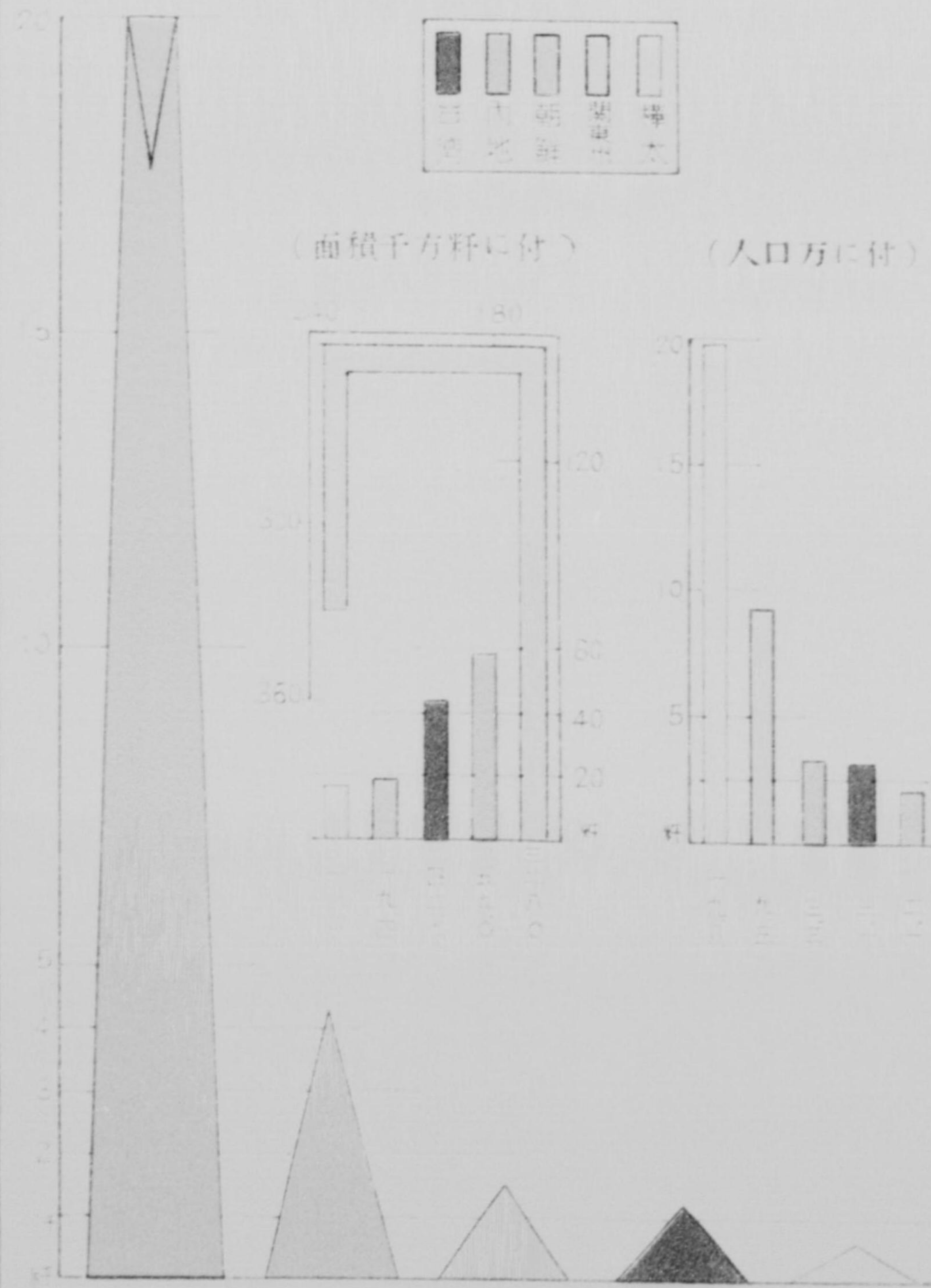
## I 人口密度 (昭和7年度末)

(一方千米に付)



## II 鐵道營業線路 (昭和7年度末)

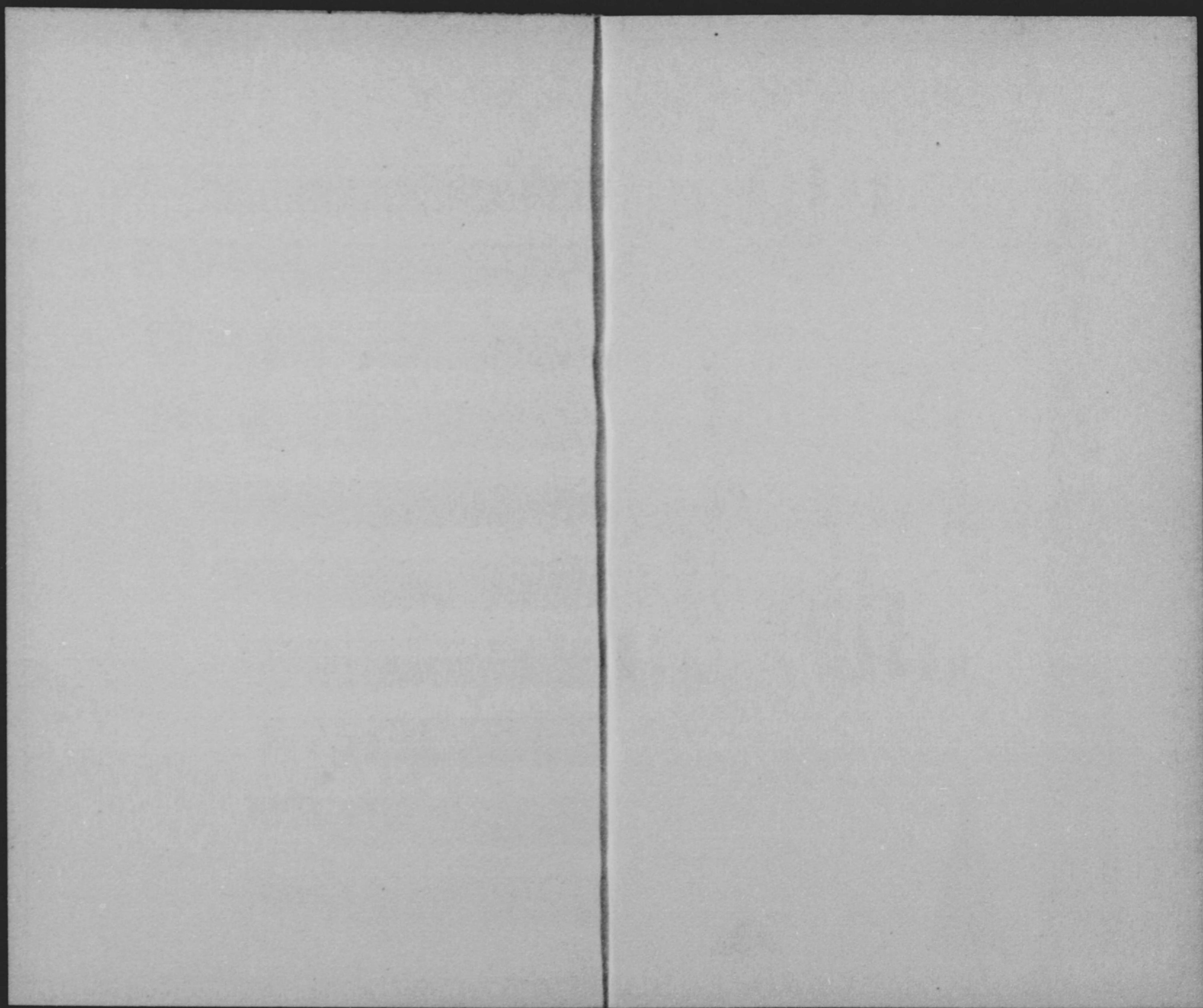
(地方鐵道を含む)



## I 人口密度 (昭和7年度末)

(一万坪に付)





(國費) 財政 (地方費)

歳入 歳出



15 10 5 0 千円 0 1 2 3 4

## 一 臺灣の沿革

臺灣及澎湖島は地理的關係より往古支那人の發見に係り中古隋、唐の時代には既に支那人の澎湖島に移住する者も相當にあつた様であるが臺灣本島との關係は模糊として全く不明である。

其の後元の末葉に至り巡檢司を澎湖島に置き是を福建省同安縣に隸屬せしめた事がある。西紀一、六〇二年蘭人、爪哇のバタビヤに東印度會社を創立し東洋貿易に従事するや後十九年東進して澎湖島を占領した。澎湖島は支那安危の鎖鑰なれば明政府は是が恢復を企圖せしむる當時世界の海上權を掌握せる蘭人の勢に抗すべからざるを知り西紀一、六二四年遂に許すに臺灣の占領を以てし其の代償として澎湖島を放棄すべき事を約するに至つた。同年八月蘭人は直ちに南部臺灣に航し臺南に上陸、同一、六三〇年安平に砲臺を築造し、同一、六五〇年更にプロブアイテンア城を臺南に築き以て政務の廳となした。茲に於て臺灣は一私立會社和蘭東印度會社の管下に置かるゝに至つたが、蘭人の占領せるは僅かに臺灣南部のみであつた。當時和蘭と共に海外發展を競ふ西班牙は比律賓群島を占領せし後西紀一、六二六年臺灣をも領有せんと欲し、艦隊を派遣せるに南部臺灣は既に蘭人の占むる所なる故豫定の航路を變じ北部臺灣即ち基隆地方を發見して此處に上陸し砲臺を設け四圍の部落を撫化して其の勢北部臺灣を風靡した。斯かる状態の趨く所遂に兩國人の衝突争闘となり其の結果西班牙敗北して臺灣より一掃さるゝに至つた。

降つて明朝滅亡の際明の遺臣鄭成功は臺灣に據りて明朝を恢復せんとし西紀一、六六一

年先づ澎湖島を略し更に臺灣本島に渡り攻め蘭人衆寡敵せず臺灣を占領する事三十九年にして遂に臺灣を棄て、爪哇に去つた。鄭氏臺灣に據るや自ら王と稱し恩威並び行はれしが其の孫克塽に至つて父祖の大業を紹ぐに耐へず清國の大軍來攻するに遇ひ遂に其の軍門に降つた。鄭氏臺灣に割據し明の正朔を奉ずる事凡そ二十三年秋に康熙二十二年、西紀一、六八三年七月である。清朝は此處に於て臺灣府を設け府の下に臺灣、諸羅、鳳山の三縣を置き、臺灣府を以て福建省に隸屬せしめ福建巡撫をして是を兼轄せしめた。然し乍ら清朝の統治たるや臺灣の開発啓導に非ずして寧ろ荒廢の孤島をして膏だ放棄せざることに努めたるが如く、政府は本島を輕視し、官吏は上下共に苟安を事としたので治政紊れ土匪の内亂相次いで起り所謂「五年大反三年小反」、光緒十四年に至る迄内亂を生ずる事、實に二十二年の多きに達し清國政府の最も困憊せしめられた所である。

歐洲諸國東漸の勢を示し臺灣も亦漸く列國の注目する所となり清國は臺灣に於ても咸豐九年安平、淡水、同治初年更に基隆、打狗の各港を開き英佛諸國と通商するに至り孤島臺灣は一躍して萬國交通の公路となつた。明治四年琉球藩民五十餘名臺灣に漂著し南部牡丹社蕃人に殺害せられたが清國政府は生蕃は化外の民なり固より政治の及ぶ所に非ずとして責任を回避したので、我が國は清國の主權臺灣に及ばざるものと認め同七年四月海軍中將西郷從道を遣はして是を討伐せしめた。茲に於て清國俄かに説を變じて臺灣は福建省に屬する事を主張し其の責を負ふて五十萬圓を賠償するに至つた。

爾來清國は時勢に鑑み臺灣統治に意を注ぐに至り光緒十一年(明治十八年)臺灣を福建省より割きて新に是を一省と爲し省下に臺南、臺灣、臺北の三府を設け臺東を直隸州として

府の下に十縣四廳を置き臺灣巡撫を任命し統治の刷新を圖る事となつた。

明治二十七年日清の修交破れ同二十八年四月十七日馬關條約に依り、臺灣及澎湖島は共に我が領有に歸した。同年五月臺灣總督府假條例發布せられ第一代總督として海軍大將樺山資紀任命せられしが當時臺灣守備の清國兵等は割讓を潔しとせず我が國に對し抵抗せんとしたので帝國は茲に斷乎として征討の命を發するに至つた。近衛師團長北白川宮能久親王殿下は大命を拜して征途に就き給ひ、躬ら軍に將せし三貂角に御上陸幾多の峻路を超えて六月三日基隆を陥れ翌日臺北に入り臺灣北部の鎮定を完了せられた。他方南部に於ける劉永福の徒も陸軍中將高島勲之助の討つ所となり六箇月にして臺灣全島全く鎮定したのである。

其の後土匪の變亂相次いで起り出沒隱現極まりなく、北を討てば南に起り、南を懲らせば北に現れ總督府は是が爲に奔命に勞れんとし乃木、桂兩總督に亞いで兒玉總督代るに及び銳意匪賊の剿討に従事し三十五年五月遂に臺灣有史以來の土匪は全く滅盡せられ臺灣數百萬の生靈此處に初めて其の堵に安する事を得我が皇威に服するに至つた。





バ新盤  
タ嘉  
ビ  
ヤ坡谷

一九〇〇  
一八三四  
二二三〇

西海麻香上汕厦福大釜横神門長鹿那

尼

兒

(口)  
距

貫防刺港海頭門州連山濱戶司崎島霸

(香港經由)

(門司經由)  
(鹿兒島沖通過)

離 (基隆基點の直航湊程)

一三〇〇  
九六一  
七七四  
四七九  
四二八  
三二八  
三二六  
一五一  
八五〇  
七二五  
一三二七  
九八二  
七三九  
六三三  
六四一  
三四四  
三三三

### 三 面積及土地

#### 一 總面積比較

本島の面積は三萬五千九百七十四方秆にして、帝國の總面積六十八萬一千方秆中その五分三厘を占め、九州よりは稍小さく、樺太と伯仲し、朝鮮に比すれば約その六分の一に當る。尙之を列國の面積に比較すれば、瑞西(四萬一千二百九十五方秆)とサルヴァドル(三萬四千二百二十六方秆)との中間に位す。

總數	臺灣	朝鮮	樺太	關東	南洋群島	内地
六八,一〇四,五九〇	三三,九七三,三三三	二二,〇七四,〇七三	三六,〇八九七七	三,七五二,七五	二,一四八,八〇〇	三八二,三〇九,〇〇〇
100.0%	五三	三二.四	五三	〇.六	〇.三	五六.一

本表は拓務統計に依る。

二 州及廳の面積

五州三廳中、面積の最大なるは臺中州の七千三百八十三方秆にして、高雄、臺南、花蓮港、新竹、臺北、臺東の順序を以て之に亞ぎ、最小なるは澎湖廳にして僅かに百二十七方秆なり。

今之を内地に比較するに臺中州は熊本、宮城、高雄州は三重、愛媛、臺南州は愛媛、愛知、花蓮港廳は和歌山、京都、新竹州及臺北州は京都、山梨、臺東廳は奈良、鳥取の各中間に位し、澎湖廳は面積狭小にして比較すべき府縣なし。

州及廳の面積

總數	三、五九七・五	100%
臺北州	四、五八六・〇	一二七
新竹州	七、三八三・四三	二〇・五
臺南州	五、四二一・四八	一五・一
高雄州	五、七三三・五八	一五・九
臺東廳	三、五二六・七	九・八
花蓮港廳	四、六二八・五七	一二・九

内地との比較

澎湖廳	二、六八七	〇・三
熊本市	七、四七七	
宮城縣	七、三八三・四	
三重縣	七、二七三・七	
高知縣	五、七六五・三	
愛媛縣	五、七三二・六	
愛媛縣	五、六六七・一	
臺南縣	五、四二一・五	
愛媛縣	五、〇八一・一	
和歌山縣	四、七三三・四	
京都府	四、六八六	
京都府	四、六二二・二	
新竹縣	四、五九八・六	
新竹縣	四、五五七	
臺北縣	四、四六五・九	
山梨縣	三、六八八・六	

臺東廳  
取縣

三士地

三、三六四  
三、四九五

本島に於ける土地制度の完成は明治三十六年にして以來諸種の産業的施設及經營の刷新に伴ひ逐年土地臺帳登録地を増加し現在に至れり。  
昭和八年一月一月現在に於ける有租地は八十四萬二千五百四十甲、無租地は四十二萬九千三百六十甲、免租地六千四百四十五甲なり。  
土地の利用に就き觀察するに本島の總面積は三百五十九萬七千四百七十三ヘクタールにして、内耕地八十一萬四千五百ヘクタール、林野二百四十六萬二千六百ヘクタール、其の他三十二萬四千ヘクタールなり。  
今臺灣の耕地及林野面積を内地其の他と比較すれば次の如し。

(昭和七年末現在)

臺東廳	實數(ヘクタール)		%	
	耕地	林野	耕地	林野
朝鮮	八四、四七二	二、四二、五六一	二、四九	七、五二
臺灣	四、五、四、二七八	一、六、三、三、〇八三	二、二一	七、八九

樺太 關東州 南洋群島 内地	實數(ヘクタール)		%	
	耕地	林野	耕地	林野
樺太	三、一、五、二七	二、八、九、五、〇六七	一、二一	九、八九
關東州	二〇、三、八、四八	九、三、三、五八	六、八六	三、一四
南洋群島	一、三、六、三三	—	一〇〇、〇〇	—
内地	五、九、四、二、五三三	三、三、〇、一、二九九	二〇、五	七、九五

本表は拓務統計に依り、内地の林野は昭和五年末なり。

四山嶽

本島は帝國第一の高山、新高山を始め、海拔一萬尺以上四十八座、九千尺級十七座、八千尺級二十四座、七千尺級二十六座を有す。即ち七千尺以上の高山の總數は百十五座の多きに達し、所謂「高山國」の名に背かずして熱帶、暖帶、溫帶、寒帶等垂直的分布の林相を有す。

帝國の全領土を通じて一萬尺以上の高山は總數六十四座を算し、就中本島は四十八座を占め、内地は僅かに十六座を有し、朝鮮、樺太は共に之を缺く。即ち新高山は一萬三千三十五尺を以て第一位を占め、富士山は漸く第六位に在り、内地第二の高山北岳は實に四十一位の下位を占むるに過ぎず。

新高山	三、九五〇	米	一位	タコロ大山	三、二二二	米	一位
次高山	三、九三二		二位	卓社大山	三、二七六		二位
秀姑巒山	三、八三三		三位	小關山	三、二五五		三位
マボラス山	三、八〇六		四位	能高山	三、二五三		四位
南湖大山	三、七九七		五位	屏風山	三、二三四		五位
富士山(内地)	三、七七三		六位	大武山	三、二三三		六位
中央尖山	三、七二五		七位	尖山	三、二三三		七位
關山	三、六六七		八位	バトツノフ山	三、二二二		八位

大	大	大	雲	東	合	北	東	南	桃	シ	畢	丹	白	南	大	間	北	槍	鎗	ハ	マ	白	ウ	赤	奥	東	白	御	穂	安	荒	巒	關	大	大		
水	萊	東	雲	東	合	北	東	南	桃	シ	畢	丹	白	南	石	ノ	ノ	ケ	ケ	イ	ビ	石	ヲ	石	穂	根	嶽	嶽	高	東	川	大	門	石	公		
窟	山	北	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
六	六	二	三	四	六	七	八	九	〇	一	二	三	四	五	七	八	九	〇	一	二	三	四	五	六	七	八	九	〇	一	二	三	四	五	六	七	八	八
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四

能	卑	千	カ	郡	能	小	仙	南	北	能	小	仙	南	北
高	南	卓	シ	大	見	丈	丈	丈	丈	見	丈	丈	丈	丈
山	主	萬	バ	山	嶽	岳	岳	岳	岳	嶽	岳	岳	岳	岳
南	山	山	ナ	山	(	(	(	(	(	(	(	(	(	(
峰	山	山	ン	山	内	内	内	内	内	内	内	内	内	内
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
三	三	三	三	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三	三	三	三	三	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七
三	三	三	三	三	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六

内地の分は第四十九回國勢一班に依る。

五河川

本島の地勢南北に長き關係上幅員狭く其の最も廣き部分と雖も僅かに百六十秆内外に過ぎず。且つ中央山脈の高峰南北に縱走するを以て、河川の發源孰も近く、上流は勿論往々中流と雖も兩岸懸崖絶壁にして屈曲甚しく水流急激にして舟楫の便多く望むべからず。而も下流に至るや河幅徒らに大をなし、支流多く灌溉に利便あるも一度豪雨に遭はんか、忽ちにして洪水氾濫の禍を被ること尠しとせず。河川の主なるもの濁水溪の百六十五秆を最とし下淡水溪の百五十六秆之に亞ぎ、以下八十秆以上のもの僅かに十を算するに過ぎず。

濁水溪  
下淡水溪  
曾文河  
淡水甲  
大烏獎  
八姑  
秀南  
卑南  
大安

一六四九  
一五五九  
一三三三  
一三〇〇  
二七八  
二二三  
一一二  
八八八  
八四四  
八〇五

## 六 氣 象

## 一 氣 温

北回歸線は本島南部嘉義市の郊外を通過し、以南は熱帶圏に屬するが故に、内地に比すれば夏季長く、冬季短きも、その最高氣温は敢て内地より高度と謂ふにあらず。而も冬季は頗る溫暖にして、高山を除き平地にては領臺以來未だ曾て降雪を見ず。北部の平地に於ては偶々霜を見る事あるも極めて稀にして、結氷は改竊後僅かに二回に過ぎず。南下するに隨ひ氣温は益々高く極南の恒春地方は冬季中と雖も溫暖なる好氣候にして恒春の稱ある所以なり。

今内地其の他と比較するに、累年平均氣温は我が臺灣最も高きも、最高極數の氣温に至りては内地其の他の地域に却つて高き處あるを見る事尠ならず。即ち臺中の三十九度三分は新潟の三十九度一分よりは二分高く、又臺南の三十六度九分は京城の三十七度五分よりは六分低く、臺北の三十八度六分は大阪の三十七度六分より一度高し。更に恒春の三十五度五分(那霸、札幌と同じ)及澎湖の三十三度九分は大泊、函館を除けば他の何れの地方よりも低し。



臺	恒	臺	澎	臺	北	隆	鮮	山	釜	京	城	大
年平均	24.2	23.2	23.0	23.6	23.2	23.7	23.8	22.8	21.8	21.9	21.0	20.0
攝氏	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度
平均	24.4	23.4	23.1	23.6	23.1	22.6	23.6	22.6	21.6	21.0	20.9	19.9
攝氏	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度
最高の極數	35.5	39.0	36.9	39.9	39.3	37.9	36.6	35.3	37.5	37.5	37.5	30.4
年	昭5-15	大正3-17	大正5-11	昭3-7	昭2-8	大正2-18	大正2-18	昭4-18	大正8-18	大正8-18	大正8-18	昭3-18
月	5	7	7	7	7	7	7	8	7	7	7	8
最低の極數	9.5	7.2	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	2.4	2.3	2.4	3.7
年	大正4-13	昭6-11	大正7-12	昭2-7	昭2-7	昭2-7	昭2-7	昭2-7	大正4-11	昭2-11	大正8-11	昭2-11
月	13	11	12	7	7	7	7	7	11	11	11	11

關	東	函	札	旭	那	長	大	東	新	青
年平均	10.7	9.2	7.7	6.1	2.5	2.5	1.5	1.5	1.4	0.9
攝氏	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度
平均	10.2	8.5	6.9	5.3	3.2	3.2	1.5	1.5	1.3	0.9
攝氏	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度
最高の極數	35.5	33.5	35.9	35.5	35.5	35.5	27.8	27.8	21.8	21.8
年	大正6-18	昭3-18	昭3-18	昭3-18	昭3-18	昭3-18	大正5-17	大正5-17	昭2-18	昭2-18
月	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
最低の極數	19.3	22.7	28.5	40.0	40.9	40.9	7.1	7.1	8.6	9.7
年	大正4-12	昭4-12	昭3-12	大正7-12	大正7-12	大正7-12	大正4-11	大正4-11	昭2-11	昭5-12
月	12	12	12	12	12	12	11	11	11	12

本島は南北に依り其の降雨期を異にす。即ち北部は十月より翌年三月迄の冬季六箇月間、南部は五月より九月に至る夏季五箇月間を雨期とす。北部は基隆市附近最も雨量多く、基隆市に近き暖暖は一年五千三百餘耗を算し、且つ世界有数の降雨地として知らる。

内地及關東州は帝國統計年鑑、朝鮮及樺太は同廳統計書に依る。

南部に於ては潮州郡善地クワルスの五千八百餘耗最多雨量を示し、最も少きは澎湖島にして一年の總量九百餘耗なり。  
之を内地其他と比較するに、本島は一般に他の地方よりも雨量多し。

昭和七年 總量 累年平均 昭和七年最多日量 月日

恒春	善地クワルス	臺東	臺南	澎湖	阿里山	臺北	基隆	暖暖	金寶	京城
二二〇三	五八四五	一六二六	一八八六	九五七	二九四二	二〇九八	二二〇九	二八二〇	五三三五	八五八
二二八七	五二三九	一七九〇	一七二五	九九四	三九六五	一七六五	二二二三	二九五八	五〇七二	一四二五
一九三〇	五二五六	一四五三	二二二五	七四七	三三三四	三八六四	三三五八	二六二七	四三二五	五五七
九一六	八一二	一〇一七	六一二	八一五	八一二	八一二	八一二	八一二	八一二	八一二
九一六	八一二	一〇一七	六一二	八一五	八一二	八一二	八一二	八一二	八一二	八一二

三 暴 風

津	太	泊	州	順	地	館	幌	川	霸	崎	阪	京	鴻	森
六二〇	六八〇	六三六	一五八九	一三六三	一五五六	二二一八	一八七二	一五〇三	一六九〇	一六四五	一六四三	一七八二	一三七八	一三七八
七二八	七三四	五八〇	一一六三	一〇三六	一〇七一	二二二五	一九六五	一三五二	一七七一	一七八二	一三七八	一三七八	一三七八	一三七八
五三七	二九〇	一〇〇五	一一〇一	五二四	七〇六	二〇〇三	一八六四	一〇六六	一六八五	六一九	一三七八	一三七八	一三七八	一三七八
八一二九	七一三五													

内地及關東州は帝國統計年鑑、朝鮮及樺太は同麻統計書に依る。

本島と内地に襲来する暴風は概ね沖縄縣の石垣島及び比律賓群島の呂宋を其の發生地とし毎年多少とも其の被害を受け特に本島に於ては時として颱風と稱する熱帯暴風に依り往々甚大なる災害を蒙ることあり。  
 今本島に於ける暴風日数を示せば左記の如く累年平均及び昭和七年全年に於て最多は澎湖にして最少は臺中なり。又昭和七年の暴風日数を月別に見れば八月最も多く九月最も少なり。

全年平均	昭和七年 累年平均											
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
全年平均	恒春	雄春	東雄	南東	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖
	二五	四	五	三	三	三	三	三	三	三	三	三
全年平均	花蓮	臺中	臺北	基隆	基隆	基隆	基隆	基隆	基隆	基隆	基隆	基隆
	六三九	一	一九九	七九	二二四	九	三	三	三	三	三	三
全年平均	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖
	二二四	二二四	二二四	二二四	二二四	二二四	二二四	二二四	二二四	二二四	二二四	二二四

### 七人人口

#### 一 總人口

本島の總人口は明治三十八年末に於て、三百十二萬人なりしが、大正元年末には三百四十三萬人に、同十年末には三百八十三萬人に、昭和元年末には四百二十四萬人に何れも増加せり。

今昭和七年末現在に就きて見るに總人口四百九十三萬人にして内、内地人二十五萬人、本島人四百四十四萬人、蕃人二十萬人、外國人四萬二千人なり。  
 昭和七年末現在帝國の總人口は九千六百萬人を算し、本島は四百九十萬人にして實に其の五分強を占む。

#### (イ) 種族別人口 (昭和七年末現在)

種族	總數		%
	男	女	
總數	四九三,九六三	二四八,六〇三	100.0
内地人	二四七,五九九	一二六,二八〇	五〇.〇
本島人	四四八,三九〇	二二七,四九九	九〇.一
蕃人	二〇〇,八三六	一〇〇,八九五	四〇.〇

朝鮮人  
外國人

九五九  
四三、三〇八

三三三  
二七、九三二

六三六  
一四、二八七

〇  
〇、九

(ロ) 内地其他との比較 (昭和七年末現在)

總數	實數	%	密度(一方軒に付)
臺灣	九六、〇七、〇三六	100.0	一四二・一
朝鮮	四、九二九、九六二	五・一	三三・〇
樺太	二〇、五九九、八七六	二一・四	九三・三
關東州	二九三、二七二	〇・三	八・一
關東州	一、三三三、八六六	一・四	三五・二八
南洋群島	七六、四七七	〇・一	三六・五
内地	六八、八六五、七〇五	七二・七	一八〇・一

内地及南洋委任統治區域は昭和七年十月一日現在にして本表は拓務統計に依る。

二 州及廳の人口

五州三廳中人口の最も多きは臺南州の百二十四萬人にして、臺中州は百九萬人を以て之に亞ぎ、以下臺北、新竹、高雄、花蓮港、澎湖、臺東の順位を以てす。人口密度を見るに

一方軒に付澎湖廳の五百十二人を最高とし、臺東廳の十八人を最低とす。

次に本島現住人口を内地(昭和七年十月一日現在)に比較すれば、臺南州は長崎、群馬、臺中州は山形、秋田、臺北州は岩手、大分、新竹州は徳島、滋賀、高雄州は佐賀、山梨の各中間に位し、花蓮港、臺東及澎湖の三廳は人口寡少にして比較すべき府縣なし。

(イ) 州及廳の人口 (昭和七年末現在)

總數	實數	%	密度(一方軒に付)
臺北州	四、九二九、九六二	100.0	一七二・〇
新竹州	九八八、一〇三	二〇・〇	二六・四
臺南州	七〇九、四七八	一四・四	一五・四三
臺中州	一、〇九四、四五四	二一・二	一四・八二
臺東州	一、二四一、五九七	二五・二	二九・〇
高雄州	六七三、二六七	一三・七	二七・七
花蓮港廳	六二六、八五	一三	一七八
澎湖廳	九五、三六六	一九	二〇・六
澎湖廳	六五、〇二二	一三	五二・四

(ロ) 内地府縣との人口比較 (昭和七年)

長崎	1,260,000
臺南	1,241,577
群馬	1,111,400
山形	1,100,700
臺中	1,094,444
秋田	1,007,800
岩手	1,005,100
臺北	988,103
大分	957,800
徳島	727,000
新竹	709,476
滋賀	701,100
佐賀	694,100
高雄	672,267
山梨	642,900
花蓮	626,366

澎湖	62,011
臺東	61,683

三 主要都市人口

本島には昭和七年末に於て七市、三十四街あり。内、人口二萬以上の市及街は三十にして、その第一位を占むるは臺北市の二十六萬六千、之に亞ぐは臺南市の十萬三千、基隆市の八萬、高雄市の七萬二千、嘉義市の六萬三千、臺中市の六萬二千、新竹市の五萬一千等なり。而して東部に於ける廳所在地たる臺東、花蓮港の兩街は僅かに一萬餘を有するに過ぎず。

次に昭和五年十月一日現在の國勢調査に依り島内七市及廳所在地の三街を内地其の他の都市に比較するに、我が臺北市は、大阪、東京、名古屋、神戸、京都、横濱、京城、廣島の八市に亞で實に第九位を占め、福岡市の上に位し、臺南市は高知、徳島、基隆市は富山、長野、高雄市は山形、盛岡、臺中市は宮崎、八戸、新竹市は福島、米澤各市の各々中間に位し、而して臺東、花蓮港、馬公の三街は共にその人口樺太の首都豊原よりも遙かに少し。

(イ) 主要都市の人口 (昭和七年末現在)

中壢街(新竹州)	二五,六四	四六	二五,一〇五	九三	二〇元
淡水街(臺北州)	二五,一七三	七六三	二四,一三	二九七	二〇元
宜蘭街(同)	二五,一四一	二,三三六	二二,五七	三七八	二二
北港街(臺南州)	二四,七六八	一,〇四三	二二,四九二	二〇三	二二
西螺街(同)	二四,四六二	一七三	二四,一六一	二二八	二二
桃園街(新竹州)	二四,四二八	七八九	二二,四九五	一四四	二二
大甲街(臺中州)	二四,〇四六	二六六	二二,六五〇	一三〇	二五
馬公街(澎湖廳)	三,四八六	二,二九七	二〇,一三五	五四	二六
鹽水街(臺南州)	二〇,八〇〇	四六六	二〇,二四八	八六	二七
苗栗街(新竹州)	二〇,四〇〇	一,〇四四	一九,一三五	二四一	二八
朴子街(臺南州)	二〇,三七四	三七七	一九,九三〇	七七	元
沙止街(臺北州)	二〇,一九八	一八一	一九,九三二	八五	元
花蓮港街(花蓮港廳)	一四,七〇八	五,九七七	七,九四一	七九〇	元
臺東街(臺東廳)	二,九七三	二,三三六	九,一三四	四九二	元

本表には市及人口二萬以上の街のみを挙げ、且つ廳所在地たる臺東、花蓮港、馬公の三街を掲ぐ。

(口)

内地其の他の都市との人口比較

(昭和五年十月一日現在)

臺北市(臺北州)	二六六,〇六六	七六,七〇五	一七四,九八三	一四,三七八	一
臺南市(臺南州)	一〇三,七〇三	二五,一八七	八四,三三三	三,一六三	二
基隆市(臺北州)	八〇,元〇〇	二〇,〇九四	五二,六四四	一,七〇四	三
高雄市(高雄州)	七二,四〇〇	一八,〇五二	五二,四四五	一,五七四	四
嘉義市(臺南州)	六二,九六三	八,九六四	五二,四二五	一,三二一	五
臺中市(臺中州)	六一,八七七	一四,一五〇	四六,三九六	一,三二一	六
新竹市(新竹州)	五〇,六三五	五,七二一	四四,三九九	五,二五	七
彰化街(臺中州)	四七,六八六	二,二四二	四四,八二〇	六,三四	八
屏東街(高雄州)	三八,二九七	三六	三七,七八六	一,八五	九
斗六街(臺南州)	三三,四一八	四八一八	三二,五七一	一〇,三九	一〇
清水街(臺中州)	三三,三七一	一,二七四	三二,三九六	一八一	一一
員林街(同)	三二,八三三	四,五八	三二,三三四	九一	一二
豐原街(同)	元,七四五	八,五八	二八,六五五	二,三三	一三
埔里街(同)	元,二〇七	一,二七〇	二七,七六九	一六八	一四
大溪街(新竹州)	元,〇八七	三三三	二八,七〇五	五〇	一五
麻豆街(臺南州)	元,〇〇八	七六九	二八,一四四	九五	一六
南投街(臺中州)	二七,〇三三	八七四	二六,〇四六	一〇三	一七

總數

内地人

本島人

外國人

順位

豐米新福八臺宮盛高山長基富德臺高福臺廣  
 原(樺太) 澤竹島戸中崎岡雄形野隆山島南知岡北島

二七〇、四一七  
 三三〇、四三〇  
 二二八、二八九  
 九六、九八八  
 九四、五四六  
 九〇、六三四  
 七五、〇九九  
 七三、〇七〇  
 七三、九二二  
 六三、四三三  
 六二、七三三  
 六二、二四九  
 五四、六〇〇  
 五四、一八八  
 五二、九〇七  
 四五、六九二  
 四五、〇一四  
 四四、七三二  
 三一、六五〇

臺花馬  
 蓮  
 東港公

二二、一五〇  
 一一、九九八  
 一〇、四三三

四 蕃社戸口

本島の生蕃人は之をタイヤル、サイセツト、ブヌン、ツオウ、パイワン、アミ及ヤミの七種族に分つ。昭和七年末現在蕃社数は六百五十一、戸數二萬四千八十、人口十四萬餘人なり。各種族中人口最も多きはアミ族にして總人口の三割一分を占め、パイワン族の二割九分、タイヤル族の二割三分、ブヌン族の一割二分等順次之に亞ぐ。

種族	總數	男	女	%
タイヤル	一四、三〇三	七、四一八	七、八八五	一〇〇.〇
サイセツト	三、四〇五	一、六七一	一、七三四	三三.六
ブヌン	一、三九四	七二八	六六六	〇九
ツオウ	一、七八八	九、一八二	八、七二七	二二.四
アミ	二、二六一	一、一五七	一、〇〇四	一.五
ヤミ	四、一九九	二、一三二	二、〇八七	二九.一
その他	四、五二〇	三、三六三	三、一五七	三三.三
總計	一、七七一	八、九七	八、〇五	一一.二

其の他

三

九

五

〇

### 五 在留外國人

本島在留外國人の總數は明治三十八年末、八千二百二十三人にして大正元年末には、一萬七千九百二十九人に、大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば二萬四千四百六十六人に増加し更に昭和八年十二月末現在に依れば四萬三千七百九十二人に達せり。昭和八年十二月末現在に於ける外國人の國籍を釋ねるに、中華民國人其の大部分を占め、英人、西班牙人等順次に亞ぐ。

昭和八年十二月末現在

國籍	總數	男	女
中華民國	四,七九二	二,八九六	一,四八六
英吉利	四,五八五	二,八八六	一,四七九
西班牙	一,二七	五九	五八
北米合衆國	三六	三三	三
露西亞	三四	二五	九

和 國  
伊 太  
葡 牙  
獨 逸

七 四 三 二

二 二 一 二

一 三 五

### 六 國勢調査

國勢調査の歴史は其の端を古代に發しバビロニアは紀元前三千八百年、埃及は同三千五十年にセンサスが施行されてゐる。舊約聖書に依ればモーゼのイスラエル人調査、タウキド王の人口調査がある。又支那に於ては、周の成王に依る人口調査及希臘、羅馬ヘブライ等に於けるセンサスは史實の物語る處であるが何れも範圍の狭少、方法の簡粗竝に其の目的性より來る制約、其他諸因由に依り其の結果に對して正確及び完全の程を保し難いものが多いやうである。

中世に於ける國勢調査は通常世界地誌的性質を有し一般に土地、建物、國民性、宗教、風俗、内外交通、兵力及び經濟關係等に關する諸種の國の記録を蒐集構成されてゐると謂はれてゐるが近代の國勢調査と幾分同一傾向を示してゐる事は注目し値するものがある。

近世の所謂國勢調査は一、七四九年の瑞典を以て嚆矢とし爾來調査の範圍、方法、時期、目的及事項等幾多の改變を経て現下世界各國に於て施行さるゝに至つた。

翻つて我が國に於ても人皇第十代崇神帝の即位第十二年に始めて性別人口調査が行はれ



降つて第二十一代雄略帝の御代秦人の人口調査も實施され以降の諸帝も亦小範圍乍ら諸種の戸口調査を施行された事は何れも史實に窺はれる處である。

徳川時代に入り八代將軍吉宗が享保六年（西曆一七二二年）全國の人口調査を施行してゐる。此の調査は我が國としては劃期的大事業と謂はねばならない。斯く既往に於て屢々施行されたのであるが現今の總ゆる點に於て完備せるそれに比較對照する時、簡粗であり不正確なものに過ぎなかつた事は明白である。

次に明治初頭に至り一部學者間に近世式國勢調査の必要性が高唱せられ是を最も模範的に施行したのが明治十二年杉博士の調査に成る甲斐國人別調である。爾來國勢調査の價値と意義は日を趨ふて普及認識せられ遂に各般の必要に促されて明治三十五年國勢調査法の發布を見、同三十八年十月一日を期し第一回國勢調査實施に決定した。然るに日露戰役の勃發あり爲に一時調査を延期するの止むなきに至つた。其の後查として此の事なく年號何時か大正と改まり時勢の進運竝に向上せる輿論に促されて帝國全版圖に亘り此處に大正九年十月一日を期し第一回調査を施行されたのであつた（朝鮮は公簿調査である）。

既述の如く大正九年迄は帝國全版圖に之を施行するに至らず幾かに地方的小範圍のものに止まり、臺灣に於ては明治三十八年十月一日臨時戸口調査を行ひしが是れ假令一植民地に限られたるものにもせよ純然たる國勢調査の性質と内容を具備し調査の結果又良好なるものがあつた。是我が國に於て劃期的事例に屬し、大正九年の第一回國勢調査實施の十有餘年前既に完全に近い調査を完了してゐた功績は特筆大書に値するものである。尙大正四年第二次戸口調査を全島に施行し是又優秀なる成果を收めたのである。

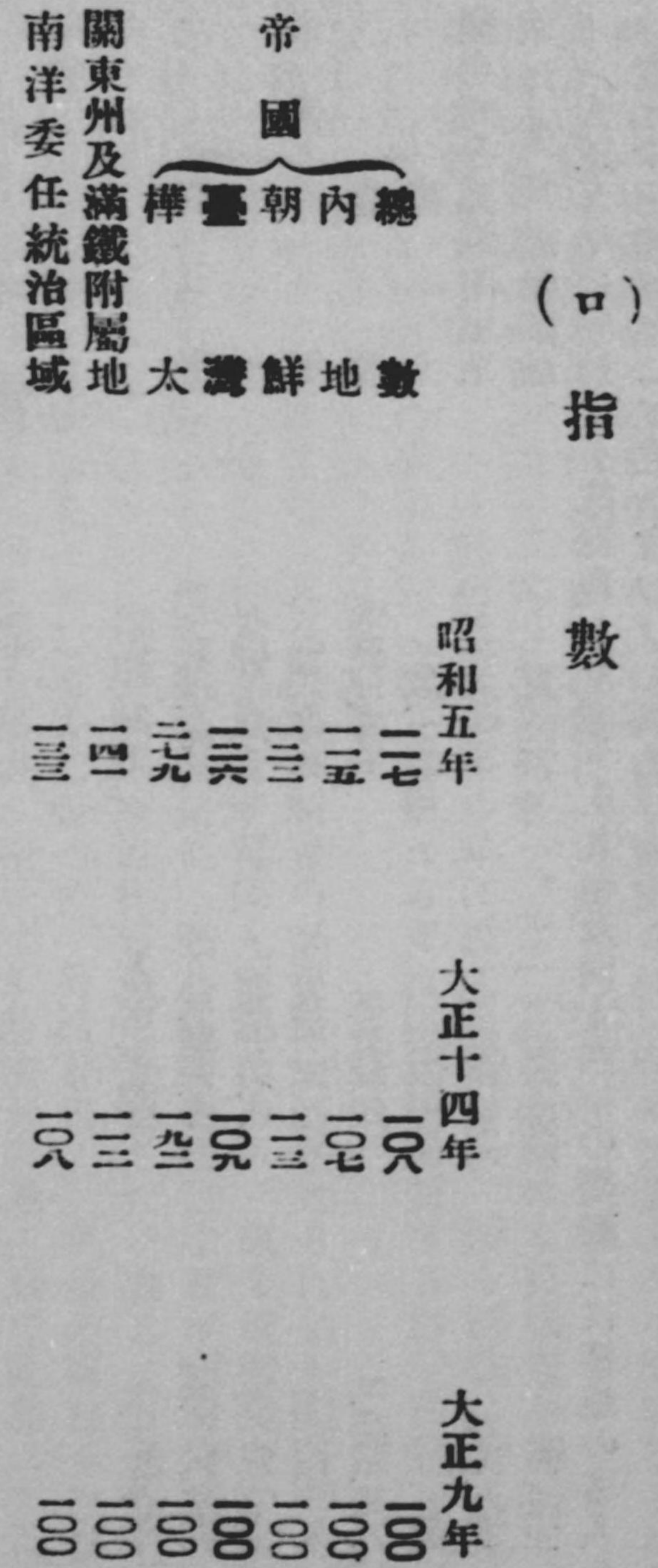
英、佛、獨、丁其の他の諸國に於て國勢調査の週期を五年制となすものあり大正九年の第一回調査後我が國に於ても是が妥當必要性を認め週期十年の中間に一回の人口事項に限る簡易調査を行ふ爲大正十一年法律第五一號に依り五年制となし既に大正十四年十月一日是が實施を見たのである。

今本島に於ける國勢調査の結果を内地其の他と比較すれば次の如し。

(イ) 實 數

帝 國	昭 和 五 年	大 正 十 四 年	大 正 九 年
總 數	20,196,033	83,456,912	76,988,379
內 地	6,445,005	59,736,813	55,963,053
朝鮮	21,058,305	19,532,945	17,264,119
臺灣	4,392,377	3,993,008	3,653,308
樺 太	295,196	203,754	105,899
關東州及滿鐵附屬地	1,318,011	1,054,074	939,953
南洋委任統治區域	69,636	56,294	52,233

（大正九年の朝鮮は公簿調査なり、大正九年及同十四年の臺灣には蕃地の蕃人を調査せず昭和五年には之を含む）



七 本籍別内地人

本島在住内地人の總數は昭和五年十月一日現在國勢調査に於て二十二萬八千二百八十一人にして内、鹿兒島縣の二萬七千五百六十五人第一位を占め、熊本縣は二萬三千七百五十三人にて之に亞ぎ、福岡縣は遙かに下りて一萬三千二百七十二人を以て第三位に在り、廣島、佐賀の二縣順次に亞ぎ、最も少きは青森縣の四百七十八人なり。

縣名	總人口	%	順位
鹿兒島	27,565	12.1	1
熊本	23,753	10.4	2
福岡	13,272	5.8	3
廣島	10,696	4.7	4
佐賀	9,661	4.2	5
山形	9,435	4.1	6
長崎	9,219	4.0	7
東京	7,777	3.4	8
神戶	7,777	3.4	9
分府	7,339	3.2	10
宮城	7,071	3.1	11
新潟	5,451	2.4	12
愛媛	5,445	2.4	13
兵庫	5,100	2.2	14
大阪	4,948	2.2	15
岡山	4,420	1.9	16

愛高福島岐茨香石靜和長京千德三神福山鳥

歌 奈

知知島根卓城川川岡山野都葉島重川井形取

三九九二 三八一九 三二〇四 三〇六〇 二九八三 二九八一 二八五八 二八二二 二八〇八 二五九四 二五三七 二三六八 二三四八 二三三〇 二二二〇 一九六〇 一八九六 一七九九

一八 一七 一四 一四 一三 一三 一三 一二 一一 一〇 一〇 一〇 〇九 〇九 〇八 〇八

八 元 元 二 三 三 三 三 三 三 元 元 元 元 元 元 元 元

滋群富山崎栃北秋岩奈青

海

賀馬山梨玉木道田手良森

一七〇四 一六一九 一五四二 一四四三 一四三三 一四一八 一三六〇 一二三六 一〇七三 一〇五三 四七六

〇七 〇七 〇六 〇六 〇六 〇六 〇六 〇五 〇五 〇五 〇二

七 元 元 四 四 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三

八 在外本島人

在外本島人は大正九年十月一日第一回國勢調査の四千七百八十五人より昭和五年十月一日第二回國勢調査の八千六百九十二人の約二倍に増加し其の約九割迄は地理的關係上中華民國に、更に其の九十一%は對岸地方に各在留す。  
中華民國以外の地方に在りては蘭領東印度の六百八十四人第一位を占め新嘉坡の百九十三人之に亞ぎ其の他は孰も百人未滿の少數なり。

本表は外務省通商局昭和五年在外邦人國勢調査職業別人口表に依り地名は帝國領事官管轄區域なり。

總數	男	女
總數	四八四	三八四
中華民國	四二二	三四九
廈門	二七二	二六三
福州	六六	四一
汕頭	二八四	二七
上海	三〇四	二二
天津	五三	三〇
廣東	四三	二六
南京	九	三
漢口	六	六
其他	二五	一四
佛領印度支那	二	三
新嘉坡	一四	三
關領東印度	四三	四九
英領印度	四三	二四
香港	七	四

九 失業者

暹羅	五	五	二〇
比律賓	二	二	二
佛蘭西	一	一	一
葡萄牙	一	一	一
亞爾然丁	一	一	一

歐洲大戰後世界的經濟界不況、産業不振は組織及機構の合理化、統制化を餘儀なくし人口の飛躍的增加と相俟ち近年所謂就職難失業時代を現出せり。

失業の社會的或は思想的惡影響と害毒は此處に贅言する迄もなく、最近頻出する凡ゆる社會問題の中心をなせり。されば失業に對する社會的關心は益々顯著となり正確なる失業統計を要望する聲は愈々熾烈となり、同統計は或は勞働市況の狀況を徵示し進んで經濟市場景氣の測定標準となり、或は人口過剩の徵候を表象するものとし更に救濟施設の効果を點檢するものとして其の職能は益々多角的價値を加へつゝあり。

次に失業統計の淵源を尋ねるに、九〇一年伊太利の國勢調査に此の項目が加はりし以來一、九二〇年國勢調査に於て英國及和蘭の兩國之に追隨せり。我が國に於ては大正九年以降の事情に關し中央職業紹介事務局及各地方職業紹介事務局の編纂に係る職業紹介統計に依り伊太利的失業者の相當正確なる數字を發見し來りしが單獨の第一義的失業統計調査は大

正十二年兵庫縣廳社會課に於て神戸市に施行し又内閣統計局は大正十四年十月一日簡易國勢調査と同時期に全國の主要工業都市及嶺山地方二十四箇所並に其の附近に就いて失業統計調査を實施せる事あるも、全國一齊に失業統計調査を爲せしは去る昭和五年國勢調査の一項目として調査せるを最初とす。

本島は植民地なる特殊地位の關係上經濟事情と現象に於て内地と其の趣きを若干異にし從來比較的失業者極く少數にして未だ曾て失業調査を實施せる事なく昭和五年國勢調査を第一回とし州廳及種族別失業者を示せば左記の如く、總數二萬四千七百四十二人にして新竹、臺中、臺北、臺南、高雄、花蓮港、澎湖、臺東の順位に在り。

總數	内地人	本島人	朝鮮人	外國人	指數
二四、七四二	九、六四〇	三三、三三二	三	三三	一〇〇〇
五、〇三〇	四、九三二	四、四二〇	三	九五	二〇三
六、八八〇	六	六、八四七	一	七	二七八
六、二〇三	一、二四	六、〇六三	一	二四	二五一
四、五四六	一、六	四、三三二	一	六	一八四
一、六三三	一九	一、四八〇	二	三	六五
六九	四	五二	一	三	〇三
三〇三	三六	二三四	一	三	一三
九〇	七	八三	一	三	〇四

一〇 人口の増加

本島の人口は、明治三十八年十月一日施行の第一回戸口調査の結果に依れば、三百三萬なりしも、大正元年末には三百三十五萬に、更に昭和元年末には四百十五萬に増加し、昭和七年末には四百九十三萬に達し、過去二十一年間に約五割の増加を示せり。

更に人口増加の趨勢を内地其他と比較するに、増加の率最も大なるは樺太にして、關東州、臺灣、朝鮮の順位を以て之に亞ぎ内地は最も小なり。

(イ) 最近二十一年間の人口 (各年末現在)

大正	年	總數	男	女	指數
同	一	三、三三三、九四三	一、七六三、四八四	一、五九〇、四五九	一〇〇
同	二	三、四一八、二七〇	一、七九四、八〇八	一、六二三、四六二	一〇三
同	三	三、四六八、七一九	一、八一〇、五九六	一、六五〇、六六三	一〇三
同	四	三、四八三、二六六	一、八二四、九四四	一、六六八、三三三	一〇四
同	五	三、五〇一、二一〇	一、八三二、一五〇	一、六八五、九六〇	一〇五
同	六	三、五〇〇、〇五〇	一、八四六、四四五	一、七三六、〇五	一〇六
同	七	三、五八三、三九五	一、八五六、一七八	一、七七二、二七	一〇七
同	八	三、六〇〇、三八五	一、八七八、八一〇	一、七五一、五七五	一〇八





一二出生率

本島の出生率は之を最近二十一年間に就きて觀るに、年に依りて増減ありき雖も、概して増加の趨勢にあり。昭和六年は人口千に付四十六人の最高を示せり。總するに内地人の出生率が此處數年來減少しつつあるは無配偶者多く且つ其の他種々の原因に依るもの、如し。

更に之を内地其の他と比較するに本島は其の率最も高く樺太之に亞ぎ關東州最も低し。

(イ) 出生率 (人口千に付)

平均	内地人	本島人	外國人
大正	四一九	四二五	二二八
一年	四一四	四二〇	一五五
二	四一四	四一八	一六〇
三	四〇九	四一四	一八八
四	四〇九	三八四	一八六
五	三六一	四一九	一九二
六	四一六	四〇九	二〇三
七	四〇五	三九六	三二一
八	三九二		

(ロ) 内地其の他との出生率累年比較 (人口千に付)

大正	同	同	同	同	同	同	昭	和	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一年	七	六	五	四	三	二	一	四	三	二	一	〇	九	〇	一	二	三
臺灣	四四二	四六〇	四六〇	四四四	四四一	四三六	四四一	四二一	四二〇	三九六	四二二	四二二	四〇一	三三八	三五二	四〇六	三二六
朝鮮	三三三	三〇二	二九九	二九四	三一九	三一九	三三七	三四六	三六一	三五〇	三六九	三五二	四〇七	四二七	四三六	四二五	二四七
樺太	四七〇	四七〇	四五九	四五三	四五八	四五三	四五八	四五五	四三四	三九九	四三八	四二七	四〇六	四二七	四二七	三三七	二七九
關東州	四五〇	四五〇	四五九	四五三	四五八	四五三	四五八	四五五	四三四	三九九	四三八	四二七	四〇六	四二七	四二七	三三七	二七九
内地	三五三	三五三	三四五	三四三	三四八	三四一	三四一	三七六	三七七	三七七	三七七	三七七	二四七	二四七	二四七	二四七	二四七





昭和 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 大  
和 正

— — — — —

一四三二一〇九八七六五四三二一年 (口)

三三六	二四一	二四九	二二六	二五〇	二四四	三三五	二七三	三三八	二七五	二九二	三三二	二八一	二五三	二五三	臺灣
二〇三	二〇六	二〇四	二〇五	二〇四	一九八	三三四	三三九	三〇七	二四一	三三三	二二一	一九三	一八〇	一六〇	朝鮮
一九〇	一八七	二六〇	二四六	二〇二	二五七	三四二	三三一	三六二	二七一	二八五	三三九	二四五	二八五	三二五	樺太
一八六	一六六	一五八	一六〇	一五六	一五二	一五八	二二六	二二七	二三八	一七〇	一八一	一九七	一九七	一八四	關東州
一九二	二〇三	二二二	三三八	三三三	三三七	三五四	三三八	三六八	三三四	三二五	二〇一	二〇五	一九四	一九九	内地

内地其他との死亡率累年比較 (人口千に付)

同 同 同 同 同 同 昭 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同  
和

— — — — —

七六五四三二一四三二一〇九八七六五四三

二〇五	二二四	一九五	二二七	三三一	三三三	三三六	二四一	二四九	二二六	二五〇	二四四	三三五	二七三	三三八	二七五	二九二	三三二	二八一
一〇八	二二四	二二八	三三三	二二八	三三〇	三三六	二二二	三三四	二二七	三三三	三三九	一九一	一六八	一九六	一六五	一六〇	一七三	一五〇
二二〇	三三〇	三〇〇	三三三	三三七	三三九	三三一	二四八	三五五	三三一	三五六	二五〇	三三三	二七八	三五五	二八〇	二九八	三三九	二八七
一七五	二一〇	一七七	一八三	二〇六	一九〇	二〇二	一五八	一七八	一六一	一九四	一九六	三三三	二〇八	二二七	一七七	一六八	一九四	一九五

澎湖廳	花蓮廳	臺東廳	高雄州	臺南州	臺中州	新竹州	臺北州	總數
1	1	1	7	0	2	8	9	聖郡
2	4	4	1	1	1	1	1	支廳
1	1	1	2	2	2	1	2	市
1	1	1	3	0	0	5	7	街
4	1	0	4	5	0	0	3	庄
1	8	0	1	1	1	1	1	區

本島の地方行政區劃は、幾多の變遷を経たる後、大正九年九月一日に至り地方官官制に根本的改革を加へ、從來の十二廳を五州二廳に改めたりしが、大正十五年七月一日更に澎湖廳を復活して三廳を爲し現に五州は之を九市四十五郡に分ち、郡の下には三十五街、二百十二庄を置き、三廳は之を十支廳に分ち、支廳の下には三街五庄十八區を置く。昭和八年末現在

### 八行政區劃

本表は拓務統計に依る。

同	同	同	同	同	同	同	同
7	6	5	4	3	2		
305	334	195	327	331	335		
332	303	189	339	336	335		
308	197	303	328	333	362		
179	147	152	187	176	153		
171	190	182	200	199	198		

大正十七年五月	同九年九月	明治四十四年二月	同十四年三月	同十五年三月
臺北州	臺北州	臺北廳	{ 臺北廳 } { 基隆廳 } { 深坑廳 } { 宜蘭廳 } { 桃園廳 } { 新竹廳 } { 臺中廳 } { 南投廳 } { 嘉義廳 } { 臺南廳 } { 鳳山廳 } { 阿緱廳 } 臺東廳	{ 臺北縣 } { 宜蘭縣 } ..... { 臺中縣 } ..... { 臺南縣 } ..... { 恒春廳 } { 臺東廳 }
新竹州	新竹州	桃園廳	{ 桃園廳 } { 新竹廳 } { 苗栗廳 } { 彰化廳 } { 南投廳 } { 斗六廳 } { 嘉義廳 } { 鹽水港廳 } { 臺南廳 } { 鳳山廳 } { 蕃薯寮廳 } { 阿猴廳 } { 恒春廳 }	..... { 臺北縣 } ..... { 臺中縣 } ..... { 臺南縣 } ..... { 恒春廳 } { 臺東廳 }
臺中州	臺中州	臺中廳	{ 臺中廳 } { 彰化廳 } { 南投廳 } { 斗六廳 } { 嘉義廳 } { 鹽水港廳 } { 臺南廳 } { 鳳山廳 } { 蕃薯寮廳 } { 阿猴廳 } { 恒春廳 }	{ 臺中縣 } ..... { 臺南縣 } ..... { 恒春廳 } { 臺東廳 }
臺南州	臺南州	嘉義廳	{ 嘉義廳 } { 鹽水港廳 } { 臺南廳 } { 鳳山廳 } { 蕃薯寮廳 } { 阿猴廳 } { 恒春廳 }	..... ..... { 臺南縣 } ..... { 恒春廳 } { 臺東廳 }
高雄州	高雄州	阿緱廳	{ 阿緱廳 } { 恒春廳 }	..... { 恒春廳 } { 臺東廳 }
臺東廳	臺東廳	臺東廳	{ 臺東廳 }	{ 臺東廳 }
花蓮港廳	花蓮港廳	花蓮港廳	{ 花蓮港廳 }	{ 臺東廳 }
澎湖廳	高雄州	澎湖廳	{ 澎湖廳 }	{ 澎湖廳 }

同十六年三月	同三十年九月	同十九年四月	同十八年八月	同十八年八月	同十五年八月
{ 臺北縣 }	{ 臺北縣 }	{ 臺北縣 }	{ 臺北縣 }	{ 臺北縣 }	{ 臺北縣 }
{ 宜蘭廳 }	{ 宜蘭廳 }	{ 臺北縣 }	{ 臺北縣 }	{ 臺北縣 }	{ 臺北縣 }
.....	{ 臺北縣 }				
{ 臺北縣 }	新竹縣				
	{ 臺中縣 }	{ 臺中縣 }	臺灣民政部		
				臺灣民政部	臺灣縣
	嘉義縣				
	臺南縣				
{ 臺南縣 }	鳳山縣	{ 臺南縣 }	臺南民政部		
.....	{ 臺南縣 }			臺南民政部	臺南縣
	鳳山縣				
{ 臺東廳 }	{ 臺東廳 }				
{ 澎湖廳 }	{ 澎湖廳 }	{ 澎湖島廳 }	{ 澎湖島廳 }	{ 澎湖島廳 }	{ 澎湖島廳 }

二 行政區劃の沿革

### 九 警察官署及職員

本島の地方警察機關は昭和七年末現在に依れば、州警務部五、廳警務課三、警察署八、郡警察課四十五、支廳十、派出所及駐在所千五百十八にして、同職員は警視二十二、警部及警部補五百三十七人、巡查七千三百九十九人なり。

今之を内地其他と比較するに、巡查一人に付面積の最も大なるは樺太の七十二方秆五にして、朝鮮、内地之に亞ぎ、臺灣は四方秆九にて第四位を占め、最も小なるは關東州の約一方秆なり。

尙人口に就き之を見るに内地の千四百四十八人第一位を占め、朝鮮の千四百四十人、臺灣の六百六十六人、樺太の五百八十九人、關東州の三百八十八人順次に亞ぐ。

警察署	派出所及駐在所	職員		面積 方秆	人口
		警視	警部及警部補 巡查		
臺灣	三	三	七、九〇九	四九	六六六
朝鮮	二五二	五七	一八、〇七六	四九	一、二四〇
樺太	二五	三	一八、〇七六	七五	五八九
關東	二五	三	四、三〇三	〇九	三〇八
内地	一、三三三	一四	五、〇六八	六六	一、二四八

本島の警察署には警察課及支廳を含む。

内地は帝國統計年鑑、其の他は各縣統計書に依る。

# 一〇 農業

## 一 農業戸數

本島の農業戸數は昭和七年末に於て四十萬四千戸にして、總戸數の四割六分を占め、農業者一戸當平均耕地面積は二・〇二ヘクタールに當る。

今之を内地其の他と比較するに、農業者一戸當平均耕地面積最も大なるは關東州の三・一一ヘクタール、樺太の二・九三ヘクタール之に亞ぎ、本島は第三位を占め、内地は一・〇五ヘクタールを以て最下位に在り。

昭和七年末現在

地域	農業戸數	總戸數百に付農業戸數	農業戸數一戸當耕地面積ヘクタール
臺灣	404,000	46.5	2.02
朝鮮	293,088	80.5	1.97
關東	107,559	18.6	3.13
關州	65,509	29.3	3.11
南洋群島	11,431	66.0	1.19
内地	564,250	?	1.05

本表は拓務統計に依る。

### 二 耕地面積

本島の耕地は總面積の二割餘を占め、八十一萬四千四百ヘクタールにして内、田四十二萬六千二百ヘクタール、畑三十八萬八千二百ヘクタールなり。  
 今本島の田及畑の面積を内地其の他と比較すれば次の如し。

内地	耕地面積(ヘクタール)		%
	田	畑	
臺灣	八四、四七一	三六、八三三	三三・三
朝鮮	四三、五四一・七	二七、〇七三	三七・五
南洋	三、五三七	三、五三六	一〇〇・〇
關東	二〇三、八四八	二〇三、八六〇	九〇・五
樺州	一、三六三	一、三七一	九二・二
南洋群島	五、九四二、五六三	二、七四九、二七	五七・七
本表は拓務統計に依る。			

昭和七年末現在

### 三 農 産

本島の農産物は、昭和七年中の總生産價額二億四千九百五十萬圓にして内、普通作物一

總 普通作物類	生産價額	%	作付面積	收穫高
米(玄米)	二四、三二、四六〇	一〇〇・〇	—	—
甘藷	一、三、七九、三八〇	六・四	—	—
豆類	一、三、四九、三四七	五・四	六、八四七・七	八、九四九、二六石
小豆	一九、三三、〇四七	七七・七	一、三四七・一	二、三八八、五四千石
其他	九、九一、二六六	〇・四	一、九一八・三	七、五六一九石
特用作物	五、三〇、四二二	〇	七、九七	四、八八二石
甘蔗	四、〇七、二四三	〇・三	?	?
粗製茶	七、九三、三三三	三二・三	—	—
落花生	六、五〇、〇三五	二六・三	一〇、九四九・六	一、三、四一五、一九七千石
烟草	二、六〇、八四九	一・〇	四、五五九・三	一、四、七〇四、一五三斤
草	二、五二、一九七	一・〇	二、九三〇・二	五、二二〇、七石
其他	七、六二、〇三七	〇・三	七、四六	二、二三三、四七八斤

億五千五百七十萬圓、特用作物七千二百九十萬圓、園藝作物二千八十萬圓なり。  
 更に之を作物別に觀るに、米は一億三千四百九十萬圓を以て第一位を占め、甘蔗は六千五百六十萬圓を以て之に亞ぎ、甘藷の一千九百三十萬圓、蔬菜類の一千二十萬圓、バナナの五百四十萬圓、粗製茶の二百六十萬圓、落花生の二百五十萬圓、鳳梨の二百萬圓、柑橘の壹百六十萬圓、豆類の壹百萬圓等順次に亞ぐ。





姜愛薯竹龍棕藤筍木竹薪用

玉 眼 栢

黄子椰皮肉皮 炭材材材額

一三六八〇	七、二六六	一九七四三	五三、六一五	三九、九二七	一四、七〇七	三三、六五八	五二、二七〇	一一、三二六	一、三七八	二、三二六	三、八三三	三、八三三	一〇、四七二
-------	-------	-------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	-------	-------	-------	-------	--------

〇・二	〇・二	〇・三	〇・五	三・八	〇・一	〇・三	四・九	一一・八	一三・六	二二・〇	三七・二	一〇〇・〇
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	------	------	------	-------

本島の林産物生産總價額は、昭和七年に壹千五十萬圓を算し内、用材の三百九十萬圓第一位を占め、薪材の二百二十萬圓、竹材の百三十萬圓、木炭の百二十萬圓、筍の五十萬圓等順次之に亞ぐ。

一三二 林 産

牛 七 鷺 鷺  
面  
乳 鳥

四七、三九四	二七、〇三三	二九、三三七	七、四九七
--------	--------	--------	-------

一六	一〇・一	一〇	二六
----	------	----	----



魚名	價額	%
鮫	一四四八九.六〇七	一〇〇.〇
鯖	六一七〇.五八四	四.三
狗	一〇七三.七六六	七.四
旗	一〇七.九三〇	〇.八
黃	四八一.五三六	三.三
鮪	六〇〇.四〇九	四.四
鱈	五六五.九三四	三.九
鱈	二九一.二〇〇	二.〇
花	九〇〇.四一七	六.二
魚	八五.五〇〇	〇.六
魚	五五.五一九	〇.四
母	七二.七三〇	〇.五
總		
遠洋漁獲物		
額	一四四八九.六〇七	一〇〇.〇

本島の水産總價額は、昭和七年には一千四百五十萬圓を算し内、遠洋漁獲物六百十七萬圓、沿岸漁獲物三百三萬圓、養殖場漁獲物三百十三萬圓、水産製造物百五十四萬圓、製鹽六十二萬圓なり。

一四 水 産

カーボンブラック

七三〇.〇〇〇

七三〇.〇〇〇

一.五



製 鹽

六、一七三

E-11

一五 工 産

本島の工業生産總價額は、昭和七年に二億一千二百六十萬圓を算し内、砂糖の一億四千三百萬圓は群を抜いて第一位を占め、蜜餞及菓子等の四百七十七萬圓、鳳梨罐詰の四百六十三萬圓、再製茶の四百三十五萬圓、鐵工の四百三十萬圓、木製品の四百萬圓、酒精の三百七十萬圓、セメントの三百二十三萬圓等順次に亞ぐ。

品名	生産價額 (円)	%
總額	二,一七〇,三七七	100.0
砂糖 (稅抜)	一,四三二,一九四	六七.三
酒精 (稅抜)	三六七八,〇四二	一七.一
再製茶	四三三,二四三	二〇.〇
製糖用其他の茶	二,四九,三五一	一.三
機械器具及原動機	三,九六四,一〇六	一八.三
木製品	三,三三〇,四五二	一五.三
セメント	五五七,三〇二	二五.七
染色類	二,四一三,三〇四	一一.一
麵類	四,二九八,七五八	一九.八
鐵工類	二,五〇八,二二九	一一.五
肥料		

金銀細工	味噌及醬油	植物性油及油粕	煉瓦及瓦類	金銀紙及線香	製織物	糖(稅拔)	靴	製靴	竹及籐細工	鳳梨罐詰	精製棹	製錢及菓子	其の他			
一八八四四九七	二四一九〇一八	一四四〇八八一	二六八八〇八	一五二二二六六	一八四八九五二	二六二二八二四	二六二二三八三	二九二四四九八	一〇一八五〇八	一〇五〇四九七	一四一五八八六	四六三一三八九	一二九六五二六	六四八五八	四七〇二一六	八五五〇七五〇
〇九	〇八	〇七	〇七	〇九	〇六	〇三	〇三	〇五	〇五	〇七	〇三	〇三	〇三	〇三	〇三	〇三

一六糖業

本島の糖業は領臺當時其の栽培製糖共に幼稚にして僅々八、九千萬斤の粗糖を製産するに過ぎず、需要の四分の三は海外の供給に俟つ状態に在りき。是に於て糖政の確立、糖業奨励規則の制定、原料採取區域の限定、蔗苗取締規則の制定其の他諸種の糖業研究機關の設置等に依り爾來顯著なる發展をなせり。明治三十五年期に於ては八千二百六十萬斤を産するに過ぎざりしが、大正十年期には四億二千萬斤、即ち約五倍の増産を見るに至り、昭和八年期に於ては、公稱資本金二億五千萬圓、作業工場數百三十二、作業能力四萬四千四百噸を有し、其の製糖高十億五千六百萬斤に達す。内新式製糖會社の數は十一にして作業工場數四十五、作業能力四萬三千噸を有し、その製糖高十億三千萬斤を算するに至れり。

總數	公稱資本金	作業工場數	作業能力	製糖高	% (製糖高)
新式製糖會社	二九,五九六	三三	四四,三八八	一,〇五六,一〇七,三三三	一〇〇〇
臺灣製糖	二四,七七七	三三	四三,六八八	一,〇八〇,〇六六,五〇三	九七三
新興製糖	六三,〇〇〇	一	一一,八二四	三二一,六〇〇,九四六	三〇五
明治製糖	一一,〇〇〇	七	五,六〇〇	一六,一三〇,九九三	一五
大日本製糖	四八,〇〇〇	六	八,五〇〇	一六八,九七六,八五二	一六〇
鹽水港製糖	五,一四七	六	七,六〇八	二二,六〇一,八九三	二二九
	三九,二五〇	六	五,八八〇	二五,〇二二,〇二八	二二八

新高製糖	二八,〇〇〇	二	二,四四四	三八,六二六,八〇〇	三七
帝國製糖	一八,〇〇〇	五	三,三三四	六七,七三〇,八五七	六四
昭和製糖	三,三六〇	二	一,三二〇	二九,七五七,〇〇〇	二八
臺東製糖	一,七五〇	一	三九二	一三,四九〇,八二二	一三
新竹製糖	一,二〇〇	一	五六〇	八,六三六,五三二	〇八
沙轆製糖	七〇〇	一	三三六	六,五〇〇,七六二	〇六
改良糖廠	三,七三二	八	九二〇	一六,七八四,四一〇	一六
舊式糖廠	?	七	七九〇	一一,三五六,四二八	二一

昭和八年期は昭和七年十一月より同八年十月に至る期間を謂ふ。

### 一七 貿易

#### 一 貿易總覽

本島の貿易は之を外國貿易及内國貿易（臺灣内地間）の二種に分つべきも、今之を總括すれば明治三十年の三千一百万圓より大正元年の一億二千五百萬圓に進み、大正六年には二億圓臺に上り、大正八年には更に三億圓臺を突破し、大正十年及十一年は一般商業界並に産業界停滞沈靜を極めし爲め、二億八千萬圓に減退せるも大正十二年には三億圓臺に復活、大正十四年には四億四千九百萬圓を現出せり。昭和元年以降は四億三千萬圓臺を上下し、昭和四年に一時約四億八千萬圓に反撥し最高額を示せしも同五年には四億圓に激減、同六年には大正十四年以後保持したる四億圓臺を割り三億六千萬圓に減少せるも昭和七年には四億五百万圓に復活せり。今昭和七年の貿易總額を人口一人當りに換算すれば八十二圓餘を示す。

次に貿易總額に對する内外兩貿易の割合を觀るに、内地貿易は常に七〇%以上を占め昭和七年には實に八八%の最高を現出せり。内地と本島とが國家經濟の見地よりして益々密接不離の有機的關係を保持し愈々其の重要性を増大しつつあるは以上に依りても明白なる事實なり。

同同同同大  
正

五 四 三 二 一 年

總額

指數

輸出

輸入

輸入超過

(口) 外國貿易 (千圓)

同同同同同同昭同同  
和

七 六 五 四 三 二 一 四 三

總額

指數

輸出

輸入

輸入超過

同同同同同同同同同同大  
正

二 一 〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一 年

總額

指數

輸出

輸入

輸入超過

(イ) 貿易總表

年

總額

指數

外國貿易

內地貿易

外國貿易 % 內地貿易

一人當



昭和同同同同同同同同同同同同同同大  
 和一 正  
 一四三二一〇九八七六五四三二一年

年	總額	指數	移出	移入	移出超過
一	九,一七〇	一〇〇	四七,八三二	四三,三五五	四,五〇六
二	八,三二八	九一	四〇,四四七	四二,八三六	二,三八九
三	八,五七〇	九四	四五,七三八	三九,八九九	五,八四〇
四	一〇,八二二	一二一	六〇,一九三	四〇,六二八	一九,五六五
五	一〇,二八七	一一三	八〇,六九五	四九,五九二	三一,一〇四
六	一七,三三六	一九〇	一〇五,五八八	六七,七八八	三七,八〇〇
七	一七,六六七	一九四	一〇五,九六三	七〇,六六五	三五,二九七
八	二二,二七一	二五五	一四二,二〇八	九〇,五七二	五一,六三六
九	二九,一三三	三二三	一八一,〇九二	一一二,〇七〇	六九,〇二二
〇	三三,四一八	三四四	一八八,八九七	九三,五三二	三五,三七六
一	二〇,四七五	二四〇	一三七,三〇一	八二,一七三	四五,一二八
二	二四,〇四〇	二六四	一六九,四四三	七二,〇一八	九八,四二四
三	二七,七〇〇	三三七	二二〇,九九八	八六,六〇二	一三四,四九六
四	三四,一三五	三七九	二五二,二四九	二九九,九〇六	八五,三四三
五	三三,四一五	三五五	二〇二,一一〇	二二,四〇五	八〇,七〇五

(ハ) 内地貿易 (千圓)

同同同同同同昭同同同同同同同同同同  
 和  
 七六五四三二一四三二一〇九八七六

△は輸出超過なり。

年	總額	指數	移出	移入	移出超過
一	六,一三五	一〇〇	四〇,三二六	二一,〇九九	一九,二六六
二	六,九四九	一一五	三三,三九四	三三,五五五	一六一
三	九,七五五	一五九	三五,六三三	六四,一三三	二八,五二〇
四	九,五五〇	一五七	三五,一七三	六〇,三六七	二五,一九四
五	六,三九七	一〇七	二三,五四二	四〇,四三三	一六,八九二
六	六,八八五	一〇七	三〇,五六三	三六,九三三	六,三五八
七	六,二三四	一〇九	二九,一五二	三九,一一一	九,九五九
八	八,〇〇〇	一三〇	四二,五七六	四六,四二四	三,八四八
九	一〇,四四五	一五五	四七,九六六	五六,四八九	八,五二三
〇	一一,三三三	一五五	四九,三二五	六二,〇〇八	一二,六九二
一	一一,〇四八	一五三	四四,五九八	六五,八四〇	二一,二四三
二	九,三三一	一三三	三三,八九六	五八,三三六	二四,四四〇
三	九,七七一	一三五	三三,一八八	六四,五四一	三一,三五三
四	六,九四〇	一〇八	二三,八〇九	四五,一三二	二二,二二三
五	五,〇三八	一〇七	一九,四四九	三〇,八五九	一一,四一〇
六	四,〇八六	一〇四	一八,〇四五	三一,〇四一	一二,九五六

同	二	三三,一八七	三五五	二〇,一〇七	一一,一〇八	八〇,九七一
同	三	三〇六,八四〇	三八〇	二二,四五三	一三,一三八	八二,〇三三
同	四	三九,〇七五	四一六	二二,八七〇	一四,〇七〇	九八,三三六
同	五	三〇一,七六〇	三五五	二八,六三三	二二,一七七	九五,五〇六
同	六	三六,一八七	三三七	二〇,一四二	一一,四七三	八六,六六一
同	七	三三六,一四〇	三六一	三三,六八三	一三,四七七	八九,三三六

△は移入超過なり。

### 二 對手國別外國貿易

本島の外國貿易は大體に於て輸入超過を示す。而して對手國中、中華民國は累年主要の地位に在り。即ち輸出貿易總額に對する其の割合は少きも二割九分、多きは六割を占め、輸入貿易に於ては少きも三割五分、多きは五割二分を占む。

今昭和七年の外國貿易に就きて觀るに、總額四千九百萬圓中輸出額は一千八百萬圓にして中華民國の六百五十萬圓最も多く總額の三割六分に當り、北米合衆國の三百七十五萬圓、香港の二百七十萬圓、關東州の二百萬圓等順次之に亞ぐ。輸入總額三千一百萬圓中第一位を占むるは中華民國の一千五百六十萬圓にして總額の五割に當り、滿洲國の四百萬圓、獨逸の二百萬圓、蘭領印度の一百六十萬圓、北米合衆國及英領印度の各約一百五十五萬

圓、暹羅の一百四十萬圓等順次之に亞ぐ。

### (イ) 輸 出 (千圓)

總額	昭和七年	同六年	同五年	同四年	同三年	同元年	大正元年
關東州	一八〇四三	一九四九	三二八〇九	三三,一九五	三三,八九六	四九,三三五	一四,九六〇
中華民國	一九七三	三〇九	六一〇	一一,二一六	七九五	一,二六二	一三
香港	六五三四	八三三	一〇,一〇四	一七,六九〇	一五,三〇一	二九,七六〇	四二,六四
蘭領印度	二六七〇	二五七	三,〇三三	四,一六	五,〇七六	四,四八	三九三
暹羅	一六〇一	三,三三	四,一七五	四,二九六	四,三三	四,〇三	三三
英領印度、荷屬東印度、及英領ボルネオ	一一五	一一三	四三	三四	四三	八七	—
比律賓諸島	九七	三八	八三	五五	一四七	五七九	三四五
佛蘭西	八二	七五	六一	八五	三〇八	三七五	五二
獨逸	二九〇	二七	二五	三九	三八三	二三四	六八二
英吉利	三三	二	二	二二	五八	一三三	一,五七三
北米合衆國	六〇五	八六六	一,二五〇	一,〇二七	一,一四一	九六六	一,〇八七
其他	三七五四	三四五	二,八〇三	四,〇六八	六,三三五	六,二四一	四,九一七
其の他	三〇一	三七二	三九二	四六九	七八	四一〇	一,六一三

(口) 輸入 (千圓)

總額	關東州	中華民國	滿洲國	佛領印度支那	蘭領印度	暹羅	英領印度	海峽殖民地及英領ボルネオ	英領ボルネオ	波太刺利	獨逸	英吉利	北美合衆國
昭和七年	三,041	九三	一,五六二	四,010	一,六三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三
同六年	三,085	八八九	一,六八九	四,010	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三
同五年	三,233	八三	一,六八九	四,010	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三
同四年	三,451	二二四	一,六八九	四,010	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三
同三年	三,536	二二七	一,六八九	四,010	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三
同元年	三,108	二〇三	一,六八九	四,010	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三
大正元年	一,937	一,二五八	一,六八九	四,010	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三	一,三三

加奈陀	二七〇	三七四	七二七	三六六	三〇九	七九四	一
其他	一七	七〇〇	六二二	一〇二五	七三四	二,五四三	五五四

(ハ) 本島に於ける重要開港場

I 普通開港場		I 特別開港場 (支那型船のみに限り出入を許せるもの)	
基隆 (臺北州)	後龍 (新竹州)	鹿港 (臺中州)	馬公 (澎湖廳)
高雄 (高雄州)	東石 (臺南州)	安平 (臺南州)	
淡水 (臺北州)			

三 中華民國、香港及南洋貿易

外國貿易中本島と最も密接なる關係を有する中華民國、香港及南洋との貿易を再檢するに年に依り多少の相異あるも、東洋に於ける帝國の使命及地理的狀勢より見て益々其の重要性を加へつゝあり。即ち昭和七年に就きて觀るに、輸出額は一千一百萬圓にして輸出貿易總額の約六割二分を占め、輸入貿易は二千一百萬圓にして輸入貿易總額の六割七分に當り。



中華民國、香港、南洋貿易總額に對する百分比例

大正	昭和	同	同	同	同	同
一	一	三	四	五	六	七
輸	輸	輸	輸	輸	輸	輸
入	入	入	入	入	入	入
出	出	出	出	出	出	出
〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇
八三二	六八二	七三八	五九七	六〇九	七二八	六七三
一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七
〇二	〇二	〇二	〇二	〇二	〇二	〇二
二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七
九三	九三	九三	九三	九三	九三	九三

四 重要品別外國貿易

本島の外國貿易中輸出品の主なるものは、茶、砂糖、石炭及樟腦等なり。今昭和七年に就きて之を觀るに、茶は四百八十七萬圓を以て第一位を占め砂糖の三百十七萬圓、樟腦の一百五十五萬圓、石炭の一百三十二萬圓、布帛及同製品の百一十一萬圓等順次之に亞ぐ。

次に輸入品の主要なるものは大豆油粕、硫酸アンモニウム、米、大豆及ガンニ一囊等に於て、昭和七年には大豆油粕の一千三十四萬圓第一位を占め、硫酸アンモニウムの二百二十七萬圓、米の一百九十四萬圓、大豆の一百八十萬圓、ガンニ一囊の一百三十三萬圓、揮發油の一百九萬圓等順次之に亞ぐ。

(イ) 輸 出 (千圓)

茶	砂糖	石炭	樟腦	鹽	乾	セメント	布帛及同製品	苧	酒	錫
昭和七年	四八七〇	一三二六	一五四八	六五	三三九	三二九	一一二〇	五二	五九	二六九
同六年	七三六三	二二五七	一五八六	七	二二七	八七	一一五一	八	三三〇	二二八
同五年	八六九二	六三三	二八八四	一四八	五九七	三三三	二二五三	一一二	一四八七	三三三
同四年	九三七二	四五四	三三〇九	一六五三	一四九六	四八六	五、一七五	三三〇	二、五二六	六七四
同三年	九九二	一、二五三	三、九六五	三、二二六	八〇〇	四〇六	四、三三八	三二四	二、〇一〇	四九二
同元年	二、三四五	三、二七八	八、四三七	一、九四九	一、九三八	五、六五	六、一三七	四九九	二、〇〇一	一、九二八
大正元年	六、六七四	一、七一九	二、一八	四、五〇〇	一、一	一、一	一、一	三、七九	二、四	四、五

(ロ) 輸 入 (千圓)

大豆	昭和七年	同六年	同五年	同四年	同三年	同元年	大正元年
油	一〇,三三三	七,三五四	一〇,二五三	二,七五八	一,三三六	一,三七四	一九二七
砂糖	〇	〇	三三	二四八	一,二五二	五,三〇四	一四八
阿片	七〇八	一,一二九	一,一三三	一,〇八二	四,五三	九八七	三,〇九四
米	一九四〇	五七	一,一〇一	一,〇三三	五,〇〇〇	九,二七五	一,一五四
揮發油	一〇,八六	七七一	七四四	五九四	二八八	—	—
包	四八九	五三八	五二二	六九〇	五二四	八九八	—
大豆	一八〇一	一,五三七	二,六九八	四,二六三	三,六〇七	三,二二八	—
杉材及杉板	五五二	一〇,四〇〇	一,三八〇	二,七九九	二,八六四	二,二三七	—
小杉	四〇四	四二八	一,二二〇	一,一三二	九〇六	一,〇〇五	—
硫酸アンモニウム(粗製)	二二六七	六,一六六	七,八五一	八,四三九	一,四〇七	六,八〇四	—
ウラム(組製)	—	—	—	—	—	—	—
ガンニ(糞)(故共)	一,三三七	一,六五三	二,四〇八	二,八八四	二,〇五一	二,四八六	—

五 重要品別内地貿易

本島の内地貿易中主要なる移出品は砂糖、米、バナナ、鑛、樟腦油、鳳梨罐詰、バナナ

(イ) 移 出 (千圓)

砂	昭和七年	同六年	同五年	同四年	同三年	同元年	大正元年
米	一三,七一九	一三,〇四五	一四,一八六	一四,二六三	一三,四一四	九,八三七	二八,一三四
酒	六三,〇五三	四一,〇六七	三六,六九五	四九,三三二	五三,三三九	六三,〇九二	一〇,一五七
樟腦	二,四五三	二,六五三	二,四三三	三,五〇五	三,六〇三	四,〇八一	一,五七九
樟腦油	九六四	七六六	一,二五六	二,六一三	一,五七二	一,六八一	一,〇〇八
鑛	二,〇六二	一,八二五	二,四三三	三,〇四〇	一,七五七	二,九七六	一,五六一
鑛腦	四,九五四	四,五九七	四,八一〇	三,八二二	一,九七一	一,五七四	—
鮮魚	一,四九三	一,五〇〇	二,二一七	二,二二六	一,六三九	七九一	—

帽及酒精等なり。今昭和七年に就きて之を觀るに、砂糖は一億二千二百萬圓を以て第一位を占め、米の六千三百萬圓、バナナの七百萬圓、鳳梨罐詰の五百二十萬圓、鑛の五百萬圓、酒精の二百五十萬圓、模造バナナ帽及樟腦油の各二百十萬圓等順次に亞ぐ。次に主要なる移入品は綿織物及絹織物、肥料、鐵、酒類、鹽鱈、杉材及杉板、紙、小麥粉等にして、昭和七年には綿織物及絹織物の千三百四十萬圓第一位を占め、鐵の八百萬圓、硫酸アンモニウムの三百六十萬圓、紙の三百五十萬圓、杉材及杉板の三百四十萬圓、小麥粉の二百七十萬圓、ガンニ(糞)の二百三十萬圓、毛織物及清酒の各二百二十萬圓等順次に亞ぐ。

硫酸 モニ ウア ムン	鹽 磁	陶 磁	煎 子	杉 材 及 杉 板	紙 卷 煙 草	調 合 肥 料	ガ ン ニ 一 糞 及	黃 麻	燐 寸	紙 粉	小 麥	綿 絲	毛 織 物	メ リ ヤ ス 衣 (各 種)	肌 糖	砂 糖	松 材 及 松 板
三六二九	一一三四	一一九一	一一〇〇	三、四〇八	一、八八八	一、五〇五	二、二八一	一、〇六七	三、四七一	二、七二七	六、四七	二、二一一	一、三三八	一、三三八	六、二四	一、七四一	
一、三七四	一一一九	九一五	一一五二	二、六九三	二、〇九一	一一三三	一、七六〇	一一五五	三、三三四	二、〇二二	六、五四	一、三七三	一、〇七	一、二二五	一、二二五		
二、七二二	一、五三六	一一〇〇	一一九七	二、七九六	二、七五一	九三五	一一二七	九〇七	三、二五五	二、三七四	一、一四一	一、三六八	一、一〇六	一、〇八三	一、四二四		
一、八二五	三、〇三二	一一八五	一、七八一	三、六〇九	二、五八九	九二九	八九〇	一、三七八	三、五六七	三、二二六	一、五三一	二、〇〇六	一、四一八	八、五五	一、七八六		
一、〇六四	一、八八九	一一七九	一、四五〇	二、六四一	二、五四三	一、〇九四	一、三二九	一、四七八	三、二二七	二、九八五	一、二五七	一、三六八	一、二〇三	一、二四五	一、七八二		
一、五二三	二、一九六	九六三	一、六一八	二、二六四	二、一一四	一、〇一五	一、八〇七	一、〇九五	三、〇六六	三、四四〇	一、六四二	一、三四四	一、五〇九	一、一九〇	九、五五		
一、八二八	二、三六	六、三三	二、四〇九	五、六〇	二、二五	二、二五	二、二五	四、八二	八、三八	一、六九〇	一、六六	三、四七	一、九四	八、七九	三、七五		

過 燐 酸 肥 料	錫	麥 酒	清 酒	鐵 酒	絹 織 物 (各 種)	綿 織 物 及
一、四〇〇	一、三〇一	一、九五六	二、二九五	八、〇一四	一、三三五八	
一、〇二八	七、六五	四、五三	二、〇三二	七、三四四	一、三五九六	
一、三三五	一、〇〇三	二、三九九	二、二一四	七、九〇二	一、三三九四	
一、六三九	一、二九八	二、六八七	二、二九九	九、一六四	一、六八七四	
一、八〇九	一、四八五	三、〇三五	二、二六二	八、六九六	一、五〇七八	
一、六四九	二、七六五	二、三二一	一、六五七	六、二二四	一、九八〇六	
五、八〇	四、六八	一、三五四	一、三五四	一、八八〇	五、〇二六	

(口) 移 入 (千圓)

鳳梨 罐 詰	石 炭	鹽 節	食 鹽	模 造 バ ナ マ 帽	檜 材 及 檜 板	切 乾 薯	バ ナ ナ
五、一五一	四、六〇	三、一〇	九、九九	二、〇九四	一、七三九	七、八	六、九八三
四、一五八	四、六八	五、三七	一、二一八	三、八三八	一、〇九一	七、四九	八、三三九
三、四八三	三、六一	八、〇五	八、三八	一、四一九	一、二〇三	四、一	八、三七〇
四、四〇八	三、八七	一、五七一	七、〇九	二、〇二四	一、九二四	四、二五	八、四一九
二、六〇四	九、〇九	一、七二一	六、四六	一、七四一	一、五五九	一、五九六	八、六二五
一、七五二	一、四七三	一、八一八	九、〇四	一、七八八	二、六三三	六、六〇	一〇、九〇〇
三、二	二、九	三、七	三、七	三、三	三、六	三、七	三、七

六 港別貿易

昭和七年に於ける本島の輸移出入貿易總額は四億五千萬圓にして之を港別に觀るに基隆の二億二千萬圓第一位を占め總額の五割に當り、高雄の一億八千萬圓之に亞ぎ、四割四分を占め、安平の一千三百萬圓、淡水の二百七十萬圓を始め殘餘の諸港は之を合算するも尙僅かに總額の六分を占むるに過ぎず。

今之を内地其の他の諸港と比較するに、基隆は神戸、横濱、大阪及大連に亞ぎ第五位を占め、高雄は釜山の下位にて第七位を保ち本島第二の貿易港たるの地位を示し、更に安平は平壤、武豊、淡水は伏木、大邱の各々中間に位す。

港名	輸 出	輸 入
神 戸	四九,三〇三	五五,六四七
横 濱	四〇,六五九	三五,三五八
大 阪	三三,四二二	二六,七九七
大 連	三〇,二一九	二〇,六九〇
釜 山	九七,一〇一	一四,六六九
山 崎	八二,八九七	一〇,二六四
釜 山	三三,九八五	四,七四八
高 雄	四四,一九六	五九,六六三
仁 川	二五,五六六	三,〇一四
小 樽		
總 額	四九,三〇三	五五,六四七

昭和七年(千円)

港名	輸 出	輸 入
平 壤	二五,一〇〇	二二,三八四
安 平	七,八	二,六八一
武 豊	三五	一三,三四三
伏 木	一九三	三〇,七六
淡 水	五〇	二,八一
大 邱	一〇七	二,四七〇
那 霸	一七三	一,七三三

内地は帝國統計年鑑、其の他は各廳統計書に依る。  
内地各港以外は輸出入中に各移出入を含む。



## 一八 財 政

## 一 總督府財政

臺灣總督府特別會計は明治三十年度を以て開始されしも同三十八年度より全然國庫の補助を受けずして、獨立財政の實を擧ぐるに至れり。爾來國庫に對し内地に於て消費する砂糖の消費税全部を提供する等國庫に多大の貢獻を爲しつゝあり。今其の趨勢を窺ふに明治三十八年度の歳入は僅かに二千五百萬圓に過ぎざりしが大正元年度には六千萬圓に躍進、同八年度には一億圓を突破、爾來年々共に漸増し昭和四年度には實に一億五千萬圓の最高額を示せり。昭和五年度以降世界的不況、産業界萎靡沈滞及其他諸多の國際的國內的因由に依り、昭和五年度は約一億三千萬圓に、同七年度は一億二千萬圓に各々減退せり。次に歳入中其の主要部分を占むるは官業及官有財産收入にして、其の歳入總額に對する割合は、年に依り多少の高低あるを免れざるも少きも三割九分、多きは六割を超え昭和七年度に於ては六割強に達せり。

歳出は明治三十八年度の二千萬圓より、大正八年度の七千二百萬圓、同十一年度の九千六百萬圓に各々増加し、同十二年度以降は八千萬圓臺に一時減退せるも昭和元年度には再び九千萬圓臺に増加し、同七年度には九千七百萬圓に達せり。

年度	歳入 (千圓)				歳出 (千圓)
	總額	租稅	官業及 産收入	其他	
明治三八年	二五,四一四	七,三八五	一三,九二九	四,一〇一	二〇,四三三
同三九年	六〇,三九六	一三,四九四	二四,七三〇	二二,〇七三	四七,一八九
同四〇年	六五,四三三	九,九六九	三六,九五七	一八,四九九	四六,一六七
同四一年	八〇,五〇一	一三,三〇六	三九,六八八	二九,四六六	五五,三三三
同四二年	一〇〇,一六六	一五,二三〇	四九,六三九	三九,三〇七	七三,三三三
同四三年	一二九,二八八	二四,三〇二	五一,八四六	四三,〇〇〇	九三,三三〇
同四四年	一三三,〇三六	二二,二九九	四三,九六五	四六,八三一	九六,三三〇
同四五年	一三三,〇三三	一九,〇一七	五九,六五七	三四,七四九	九六,三三〇
同四六年	一一二,〇九八	一七,六七三	六五,二一〇	二八,三〇五	八七,七九九
同四七年	一一三,六一五	一七,五九七	六四,二七九	三一,七三九	八六,八六二
同四八年	一一九,五六〇	一八,三八四	六九,六三六	三一,五四〇	八七,七七二
昭和	一三三,七七八	二二,九二二	七〇,六四五	三九,二二二	九二,九四一
同一年	一三三,七七八	一八,五六〇	七〇,〇四〇	五〇,〇二七	一〇一,五三三
同二年	一四七,三三四	二〇,七九四	七八,七四六	四七,九八四	一〇九,一〇九
同三年	一五〇,二四一	二二,五五九	八一,一六二	四七,五二〇	一一三,二九三
同四年	二二九,七六八	一九,〇四四	七四,九六六	三五,七七八	一〇九,九七一

% (歳入)

歳出 指數

年度	總額	租稅	官業及 産收入	其他	歳出 指數
同五年	二二五,九七二	一八,〇六五	七〇,二四八	二七,六五九	一〇八,五
同六年	三〇三,〇〇〇	一八,三六四	七二,七三五	二九,二〇四	一〇七,六
同七年	三〇三,八七九	一五,七五七	七〇,〇五五	一七,〇六七	一〇七,七
同八年	二〇二,八二二	一六,七三三	七七,六八八	一六,四〇〇	一〇八,三

本表中昭和七年度迄は決算、同八年度以後は豫算なり。

## 二 地方財政

大正九年地方官制の根本的改正と同時に地方自治の基礎を確立せんが爲め州、廳地方費、市及び街庄なる地方團體を新設し以て現在に至れり。従つて臺灣の地方財政も亦前記地方制度の發生と共に成立し今日に及べり。臺灣の地方制度の大要を説明すれば州制は律令第三號、廳地方費令は律令第四號、市制は律令第五號、街庄制は律令第六號を以て何れも大正九年七月三十日公布、同年十月一日を期し實施され、自後多少の改正ありたるも昭和七年末現在に於ける地方團體は五州三廳、七市三十四街二百二十三庄なり。

今地方財政の大正十年度と昭和七年度とを比較するに州費は歳入千六百八十萬圓、歳出は千三百二十萬圓より千九百二十萬圓及び千四百九十萬圓の各一割三、四分を、廳地方費は歳入百八十六萬圓、歳出百三十六萬圓より二百五十五萬圓及び百九十三萬圓の各四割を、市費は歳入三百七萬圓、歳出二百五十一萬圓より九百五十二萬圓及び七百八十九萬圓の各二倍強を、街庄費は歳入九百八十八萬圓、歳出八百四十八萬圓より千七十六萬圓及び九百四十四萬圓の各一割を各々増加せり。

### (イ) 州 費 (單位千圓)



同 九 二六四八 四三六 三三三 三四 二四三 二六四八 二七九 一、二六九 一九五

本表中昭和七年度迄は決算、同八年度以後は豫算なり。

(ハ) 市 費 (単位千圓)

年度	歳入			% (歳入)		
	總額	市税	其他	總額	市税	其他
大正 一〇	三〇六九	一、二五九	一、八一〇	一〇〇	三七八	五二二
同 一一	三、三八五	一、二〇〇	二、一八五	一一〇	三五五	五二九
同 一二	三、九二八	一、〇七五	二、八五三	一一〇	二七四	五二九
同 一三	四、〇六八	一、一八〇	二、八八八	一一〇	二七九	五二九
同 一四	四、六七九	一、五八二	三、〇九七	一一〇	二八〇	五二九
昭和 一	五、三〇七	一、六三四	三、六七三	一一〇	二八〇	五二九
同 二	六、〇四九	一、六九二	四、三五七	一一〇	二八〇	五二九
同 三	六、四七七	一、八二四	四、六五三	一一〇	二八〇	五二九
同 四	七、六六八	二、一五五	五、五一三	一一〇	二八〇	五二九
同 五	七、四九九	二、一七〇	五、三二九	一一〇	二八〇	五二九

本表中昭和七年度迄は決算、同八年度以後は豫算なり。

(ニ) 街庄費 (単位千圓)

年度	歳入			% (歳入)		
	總額	街庄税	其他	總額	街庄税	其他
大正 一〇	九、八八五	四、八三九	五、〇四六	一〇〇	四八九	五二二
同 一一	一〇、六六一	五、三三二	五、三二九	一一〇	五〇二	五二二
同 一二	一〇、五三三	五、〇六三	五、四七〇	一一〇	四七九	五二二
同 一三	一〇、五六一	四、九四七	五、六一四	一一〇	四七九	五二二
同 一四	九、〇六八	四、五三一	四、五三七	九二	五〇〇	五二二
昭和 一	一〇、二二〇	四、九六六	五、二五四	一一〇	四八八	五二二
同 二	一〇、三八五	五、五四〇	四、八三五	一一〇	一五七	五二二

同	三	二,三三二	五,八〇五	一,六九七	三,八一九	二,三	五,一三三	一,五〇〇	三,三七九	二,三	三,三七九
同	四	二,〇〇〇	五,九一九	一,五九七	三,五二四	二,三	五,三七	一,四一五	三,二八	二,四	九,六八六
同	五	一,〇九七	六,〇六六	一,六二〇	三,二八四	二,二	五,五三	一,四一八	二,九九	二,三	九,五七三
同	六	一,〇六三	五,八九三	一,五六八	三,一六一	一,〇七	五,五五	一,四一八	二,九七	二,〇	九,三六〇
同	七	一,〇七五	五,八〇〇	一,六九四	三,二七一	一,〇九	五,三九	一,五七七	三,〇四	二,一	九,四七七
同	八	二,〇八五	六,〇八二	一,八五六	三,二四七	一,二三	五,四九	一,六七	二,八四	二,〇八五	九,四七七
同	九	二,二五五	六,二三八	一,八三六	三,二八一	一,二四	五,五四	一,六三	二,八三	二,二五五	九,四七七

本表中昭和七年度迄は決算、同八年度以後は豫算なり。

一九專賣

本島の專賣事業は現在阿片、食鹽、樟腦、煙草及酒類の五種にして、阿片は明治二十九年三月製藥所に、食鹽は同三十二年五月鹽務所に、樟腦は同年八月樟腦局に於て開始せり。然るに同三十四年六月に至り之を專賣局に統一し同三十八年には煙草を、大正十一年七月には酒を加へて現在に至れり。最近二十一箇年間に於ける賣渡價額を觀るに、大正元年度には一千七百萬圓なりしが、同六年度には二千萬圓を超え、更に同九年度には三千萬圓を突破したるも、同十年度には世界的經濟界不況に伴ひ、樟腦の如きは特に前年度の一千萬圓より五百萬圓に激減したる爲め、總額に於て二千五百萬圓に低下せしが、同十一年度には稍や景況を回復したると酒專賣實施の結果總額三千四百萬圓に達し、同十二年度には四千萬圓を突破し、同十四年度には四千五百萬圓に増加せり。

最近人造樟腦の需用旺盛となり其の對策上樟腦に關する事項は一般に公表せざるに依り、昭和元年度以後の賣渡總價額には樟腦に關するものを控除せる爲め、大正十四年度に比し激減せるも、各種類別に之を觀れば阿片煙膏を除くの外は概ね增收の趨勢に在りさ謂ふべし。

大正	年度	賣渡總價額	指數	阿片煙膏	食鹽
同	一	一,七〇九,三一一	100	六〇,七八八	七,七九三
同	二	一,六四九,四〇〇	九六	五八,六〇〇	八,八九三

同同昭同同同同同同同同同同同同同大  
和 正

三二一四三二一〇九八七六五四三二一 年度

樟腦及樟腦油  
五,七九七,三〇七  
五,〇八三,〇七九  
五,三三三,〇五七  
五,一六八,七六三  
六,七三八,五八四  
七,一九五,一七  
七,〇四〇,九九七  
九,一一五,三二〇  
一,八四〇,三九〇  
五,二五六,七二六  
九,二七二,九九七  
一三,三二四,九八五  
一,〇七九,八七二  
一,二〇七,八四七  
? ? ?

煙草  
四,五三三,八三四  
四,七一九,一〇九  
四,五四九,四三二  
四,六六八,二六九  
五,三二六,二四九  
五,八一,三四三  
六,九七五,八九八  
九,七〇九,五五四  
二,四二七,五三二  
一,六五八,九九九  
一〇,七四六,二八九  
一〇,七五五,一四四  
一,一〇三,一五七〇  
二,四五六,一五四  
一四,〇〇四,五三六  
一四,九九五,六二五  
一五,八七二,三五九

酒  
六,五四〇,六九二  
八,一三三,五二九  
一,六七七,七三三  
一三,三三四,二六  
一四,〇一五,二六四  
一四,七七七,四九七  
一五,六七八,七七七

同同同同同同昭同同同同同同同同同同同同同  
和

七六五四三二一四三二一〇九八七六五四三

一六,五六一,八三  
一六,五二一,七四  
一九,五九七,九三  
二一,〇三三,七二  
三三,六六三,五四  
二七,四三三,六一  
三三,九七三,八三  
二五,四四三,〇〇六  
三四,六三三,五六二  
四〇,三二七,一五五  
四一,八一,四九二  
四三,二五六,二四  
三四,九〇九,二五三  
三六,五三四,八四三  
三三,七四三,五七  
三六,六六六,八三四  
三六,〇三三,四〇三  
三三,四〇五,五九九  
三四,〇九四,九九二

一九九  
一九五  
三三一  
三三〇  
三三一  
三三三  
三三三  
三〇四  
二六五  
二四五  
二三五  
二四九  
一九三  
一六〇  
一三三  
一三三  
一三五  
九七  
九六

五,六八三,八六四  
五,八〇〇,七二四  
六,五九〇,一五三  
六,九二四,三七七  
七,五五二,二四五  
七,六一九,四二二  
七,七〇八,二三五  
六,七七二,六一四  
六,二八三,二七七  
五,六四〇,六六五  
五,一八四,〇三六  
四,九二一,六六八  
四,七二六,五七六  
四,三七五,七七四  
四,一〇三,一九一  
三,七五〇,七九六  
四,二六六,一四〇  
三,八九七,六七三  
三,二四四,七二三

八,九六,四六九  
八,七三,九七八  
九,五二,九三五  
一,一八〇,四六五  
一,〇九三,二〇五  
九,七九,〇八五  
九,九七,七七八  
一,七五三,六七七  
一,八一〇,三〇七  
二,三八二,八三三  
二,八三八,二八一  
二,四六五,六四九  
二,一七二,八七六  
二,二二五,九四七  
二,〇九二,二七〇  
二,四〇〇,四七四  
二,三三四,一一一  
二,四九九,六三〇  
二,五三八,〇六四

同 同 同 同

七 六 五 四

? ? ? ?

一六、二七五、九一六  
一五、七一三、三二〇  
一四、四六五、九六三  
一四、七八八、七五八

一五、二六九、六六八  
一三、七三三、八三三  
一三、五八二、二九三  
一三、五三三、四五七

樟腦及樟腦油には副産物を含む。

### 二 金 融

#### 一 幣 制

領臺當時に於ては幣制混沌とし、商取引、經濟、産業は甚しき混亂狀勢にありて弊害百出し制度の改正統一の急なるものあり。  
政府は本島の舊慣及び中華民國との貿易關係に鑑み諸種の施設をなせしも目的を達し得ず、明治三十七年六月臺灣銀行に對し金券發行を許可せり。然れども同四十年に至り對岸より銀貨の輸入激増し再び幣制を紊すの慮を生じたりしかば、翌四十一年十月是に對する諸種の方策を施し、同四十四年四月を以て貨幣法を施行せり。  
爾來本島の幣制は全く内地と同一制度の下に統一され多年の懸案も解決するに至れり。

#### 二 銀 行

本島は領臺當時銀行と稱すべきものは未だ存在せざりしも、政府の金融政策に對する努力より一般産業の發展と各種商業の殷盛と相俟つて現下の盛況を呈するに至れり。昭和七年末現在に於ける狀勢を見るに銀行數七(日本勸業銀行及三十四銀行は支店)にして、島内に於ける支店及出張所總數六十三、資本金二千八百三十萬圓(拂込金二千一百萬圓)、準備金二百三十萬圓、純益金百七十四萬圓、島内預金一億三千二百餘萬圓、同貸出金二億五千二百餘萬圓なり。



總	臺灣銀行	日本勸業銀行	臺灣支店	華南銀行	臺灣商工銀行	彰化銀行	臺灣貯蓄銀行	三十四銀行	臺灣支店	支島		公稱	準備金	純益金	年末現在(千圓)	
										出所	支店				島内預金	島内貸出金
總	三	二	一	一	一	一	一	一	一	三	三	一五,〇〇〇	二,三三三	一,七四二	二,三三三	二,三三三
臺灣銀行	三	二	一	一	一	一	一	一	一	三	三	一〇,〇〇〇	四	三	三	三
日本勸業銀行	三	二	一	一	一	一	一	一	一	三	三	五,〇〇〇	五	九〇	五	五
臺灣支店	三	二	一	一	一	一	一	一	一	三	三	四,八〇〇	四	三	三	三
華南銀行	三	二	一	一	一	一	一	一	一	三	三	一,〇〇〇	四	三	三	三
臺灣商工銀行	三	二	一	一	一	一	一	一	一	三	三	五,〇〇〇	五	九〇	五	五
彰化銀行	三	二	一	一	一	一	一	一	一	三	三	四,八〇〇	四	三	三	三
臺灣貯蓄銀行	三	二	一	一	一	一	一	一	一	三	三	一,〇〇〇	四	三	三	三
三十四銀行	三	二	一	一	一	一	一	一	一	三	三	一,〇〇〇	四	三	三	三
臺灣支店	三	二	一	一	一	一	一	一	一	三	三	一,〇〇〇	四	三	三	三

三 其他の金融機關

昭和七年度(金額千圓)

産業組合	組合數	組合員數	出資額	準備金及諸積立金	貯金	貸付金
無盡業	三	三	三	三	三	三
營業所數	三	三	三	三	三	三
出資金	三	三	三	三	三	三
給付契約高	三	三	三	三	三	三
掛金契約高	三	三	三	三	三	三

公設質舖	舖數	貸出金額	貸出金回収高
公設質舖	一四	二八六五九	二二七三
		件數	金額
		一八二四〇〇	一九四二

四 物價

物價指數は沿革的には貨幣價値の變動測定を第一義的の目的とし作成利用せられ來りしが昭和の今日に於ても尙依然として主要目的たるを失はない。然し乍ら現代經濟組織と機構の若干修正の必要ある現在此の種の測定の役立つべき唯一の目的ではあり得ない憾あり。本邦に於ける物價に關しては商工省の調査に係るものと日本銀行調査に依るものと二種あり。更に基數を何年に採るかによつても亦多少の相違あるを免れない。然し現最近最も廣汎且つ普遍的に採用されるもの日本銀行調査の明治三十三年を最古とし、次に大正三年歐洲大戰々前物價を、更に最近に於ては昭和五年一月濱口内閣金解禁の前年平均を基準とせるもの三種あり。

今本島に於ける物價指數の趨勢を知るが爲に昭和四年平均基準を百とし本島の代表的都市臺北に於ける主要生活必需品の卸賣及び小賣物價指數を示せば次の如し。

(イ) 卸賣物價指數

昭	和	昭	和	昭	和	昭	和	昭	和	昭	和
四年	五年	六年	七年	八年	九年	四年	五年	六年	七年	八年	九年
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
長梗	長梗	長梗	長梗	長梗	長梗	長梗	長梗	長梗	長梗	長梗	長梗
米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米
89.0	89.0	89.0	89.0	89.0	89.0	89.0	89.0	89.0	89.0	89.0	89.0
蓬萊	蓬萊	蓬萊	蓬萊	蓬萊	蓬萊	蓬萊	蓬萊	蓬萊	蓬萊	蓬萊	蓬萊
米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米
85.5	85.5	85.5	85.5	85.5	85.5	85.5	85.5	85.5	85.5	85.5	85.5
醬油	醬油	醬油	醬油	醬油	醬油	醬油	醬油	醬油	醬油	醬油	醬油
94.7	94.7	94.7	94.7	94.7	94.7	94.7	94.7	94.7	94.7	94.7	94.7
味噌	味噌	味噌	味噌	味噌	味噌	味噌	味噌	味噌	味噌	味噌	味噌
91.3	91.3	91.3	91.3	91.3	91.3	91.3	91.3	91.3	91.3	91.3	91.3
白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖
87.7	87.7	87.7	87.7	87.7	87.7	87.7	87.7	87.7	87.7	87.7	87.7
木炭	木炭	木炭	木炭	木炭	木炭	木炭	木炭	木炭	木炭	木炭	木炭
87.4	87.4	87.4	87.4	87.4	87.4	87.4	87.4	87.4	87.4	87.4	87.4
薪	薪	薪	薪	薪	薪	薪	薪	薪	薪	薪	薪
98.3	98.3	98.3	98.3	98.3	98.3	98.3	98.3	98.3	98.3	98.3	98.3
石炭	石炭	石炭	石炭	石炭	石炭	石炭	石炭	石炭	石炭	石炭	石炭
87.6	87.6	87.6	87.6	87.6	87.6	87.6	87.6	87.6	87.6	87.6	87.6

(ロ) 小賣物價指數

昭	和	昭	和	昭	和	昭	和	昭	和	昭	和
四年	五年	六年	七年	八年	九年	四年	五年	六年	七年	八年	九年
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
蓬萊	蓬萊	蓬萊	蓬萊	蓬萊	蓬萊	蓬萊	蓬萊	蓬萊	蓬萊	蓬萊	蓬萊
米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米
89.0	89.0	89.0	89.0	89.0	89.0	89.0	89.0	89.0	89.0	89.0	89.0
內地	內地	內地	內地	內地	內地	內地	內地	內地	內地	內地	內地
米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米
88.4	88.4	88.4	88.4	88.4	88.4	88.4	88.4	88.4	88.4	88.4	88.4
豚肉	豚肉	豚肉	豚肉	豚肉	豚肉	豚肉	豚肉	豚肉	豚肉	豚肉	豚肉
96.6	96.6	96.6	96.6	96.6	96.6	96.6	96.6	96.6	96.6	96.6	96.6
醬油	醬油	醬油	醬油	醬油	醬油	醬油	醬油	醬油	醬油	醬油	醬油
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
味噌	味噌	味噌	味噌	味噌	味噌	味噌	味噌	味噌	味噌	味噌	味噌
93.1	93.1	93.1	93.1	93.1	93.1	93.1	93.1	93.1	93.1	93.1	93.1
白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖	白糖
94.8	94.8	94.8	94.8	94.8	94.8	94.8	94.8	94.8	94.8	94.8	94.8
木炭	木炭	木炭	木炭	木炭	木炭	木炭	木炭	木炭	木炭	木炭	木炭
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
薪	薪	薪	薪	薪	薪	薪	薪	薪	薪	薪	薪
95.8	95.8	95.8	95.8	95.8	95.8	95.8	95.8	95.8	95.8	95.8	95.8

二 學 事  
一 教育概覽

明治二十八年六月臺灣總督府の開廳せらる、や、銳意教育に意を注ぎ異民族の教育に對しての多大なる研究と犠牲を投與し、諸種の施設をなしたりしが大正八年一月勅令を以て臺灣教育令發布せられ本島人教育の基礎始めて整備せり。然れども此れは内地の學制とは全く別系統にして、主として本島に於ける當時の特殊事情に鑑みて制定せられたるものなりし爲め時勢の進運に伴ひ之が改善の必要を生じ、同十一年二月發布の臺灣教育令に依り初等教育を除くの外は悉く内臺人共學の制を採るに至れり。昭和七年度に於ては初等教育機關たる小、公學校の八百九十五校、兒童三十二萬人、高等普通教育機關たる高等學校、中學校及高等女學校の二十四校、生徒一萬一千人、師範學校の四校、生徒千二百人、實業教育機關たる實業補習學校、農林、農業、工業、商業學校の三十九校、生徒五千人、専門教育機關たる醫學專門學校、帝國大學附屬農林專門部、高等工業學校、高等商業學校の四校、生徒八百五十人、帝國大學一校、學生百七十五人、私立各種學校二十校、生徒三千二百人、書房百四十二、生徒四千七百人あり。

次に初等教育機關を内地其の他と比較するに、教員一に對する小學校兒童數は南洋群島の六十七人最も多く、朝鮮の三十三人最も少く、本島は四十人強を以て關東州の上に位し第四位を占む。又臺灣の公學校、朝鮮の普通學校及關東州の公學堂兒童の教員一に對する

割合は、臺灣の五十人最も多く、朝鮮は四十八人弱を以て之に亞ぎ、南洋群島三十六を以て最下位に在り。

(イ) 教育機關 (昭和七年度)

學校數	教員數	學生、生徒 又は兒童數	教員一人に付學 生、生徒(兒童)
帝國大學	一三五	一七五	一三
醫學專門學校	三三	三三	六七
帝國大學附屬 農林專門部	三〇	一三五	二六
高等商業學校	八	三三	六七
高等工業學校	四	一五四	五・一
高等學校	四	五九五	一・〇
師範學校	一九	一三三	二・四

中學校	〇	三六〇	三・七
高等女學校	三	三六	三・三
農林學校	二	八八	二〇・一
農業學校	一	三八	一三・七
工業學校	一	六三	一〇・〇
商業學校	二	一・一六	二・一
實業補習學校	三	一九八	一・六
小學	三三	三七七六	四〇・五
公學	七三	二八二七	五〇・二
盲啞學校	二	二八	二・八
私立各種學校	三	三三三	一一・八
書房	一四	四七三	二・三
幼稚園	六	三八九	二七・〇

(保姆)

學校數(小、公學校は分教場を含む)は年度末現在、教員、學生、生徒(兒童)は三月一日現在、教員數中×は兼務者なり。

(ロ) 内地其他の初等教育比較

校數	教員數	兒童數	均一校平 均兒童	教員一人 に付兒童
臺 灣 校	三三	九三	二八四・一	四〇・五
朝鮮 太 州 地	四九	七〇、八五五	一五二・一	三三・三
樺 東 州 島	二二四	一〇九一	二四九	四三・一
關 東 州 島	二六	四三、九八一	一七五	三六・〇
南 洋 群 島	一六	三、一六〇	四〇四・五	六七・二
公 學 校	二五、六六五	一〇三、八二〇	四〇四・五	四四・四
臺 灣 校	七六	二八、七二四	三六九・七	五〇・二
朝鮮 鮮 州 島	一九四二	四七〇、三〇五	二四三・二	四七・七
關 東 州 島	一三九	三三、八二七	二四三・三	四〇・五
南 洋 群 島	三三	二、九六一	二八七	三六・一

臺灣の兒童は昭和八年三月一日現在なり。朝鮮及内地は昭和六年度現在、樺太、關東州、南洋群島(小學校の教員數は昭和六年度)は昭和七年現在にして拓務統計に依る。

二 社會教育

國民資質の向上、國民精神の涵養、個人情操の陶冶、科學的智能の啓培等何れも學校教育及び社會教育に負ふ處最も多し。學校教育の起源は歴史は極めて古く所謂社會教育の沿革は比較的新しき雖も前者には一定期間の修業年限あれども後者には原則として一定の年限ある事なく此の意味に於て社會教育の範圍と使命は廣汎且つ重大なりと謂ふを得べし。本島に於ける社會教育は内地と略其の施設及び目的を同じくし從來主として國語の普及發達に努力せる點に於て多少其の趣を異にする處あり。今本島に於ける社會教育の一斑を示せば次の如し。

(昭和八年四月末現在)

國語講習所  
簡易國語講習所  
不就學兒童教育施設  
青年輔導教育施設

箇數	生徒數又 は會員數	修了數
三六一	二二、六八〇	一三、一八三
八七	三、八四七	二、九六三
四	二、三七六	九五九
一三九	五、六〇七	三、九二八

青年團	總數	八〇五	男子青年團	五七三	女子青年團	二三二
團員數	三三、七三	二四、五四		七、三六八		
經費	104,181 円	90,498 円		一六、六四三		
家長會及主婦會	總數	六六一	家長會	四六一	主婦會	二〇〇
會員數	三三、〇五九	三三、一九三	團員		經費	二〇、二四四
少年團	團體數	六二	二八七		二二、二六	
圖書館	館數	六	藏書數	二九〇、八三三	貸付數	一六、七、七、四六
博物館	四	陳列點數	二六、五九三	閱覽人員	一〇、五、〇、三三	
				觀覽人員	三六、七、二〇	

青年訓練所 所數 二四

生徒數 一、〇七六

經費 二九、九三 円

- 社會教育團體 (昭和七年度)
- 財團法人臺灣教育會
- 財團法人臺灣體育協會
- 臺北州教化聯合會
- 新竹州同光會
- 臺中州教化聯盟
- 臺南州共榮會
- 社會教育獎勵團體
- 恩賜財團臺灣教化事業獎勵會
- 恩賜財團臺灣濟美會
- 財團法人伊澤財團

三 國語を解する本島人

本島人にして國語を解するもの數は、明治三十八年の一萬一千二百七十人より、大正四年の五萬四千三百三十七人、大正九年の九萬九千六十五人に各増加し昭和五年に於ては實に三十六萬五千四百二十七人に飛躍せるも尙本島人千に對し僅に八十四人七分を算するに過ぎず。

年	總數	男	女	指數	平均	男女別本島人千に付
明治三八年	11,710	10,801	4,691	100	38	69
大正四年	5,337	5,143	4,194	482	163	292
同 九	9,065	8,787	2,168	879	286	493
昭和五年	36,427	29,467	7,750	3,242	847	1,344

本表は大正四年迄は月口調査同九年以後は國勢調査の結果にして何れも十月一日現在なり。

### 一 衛生機關

本島には衛生機關として昭和七年末現在に於て官立十四、公立十八、私立百六十四、計百九十六の醫院、一千四百名の醫師（他に齒科醫二百六十三名）、三百五名の醫生、一千五百名の産婆を有す。醫師、醫生一人に對する人口は全島平均二千八百八十六人にして、その割合の最も多きは澎湖廳の三千八百二十四人にして、最も少きは花蓮港廳の一千八百三十四人なり。

廳	醫院		醫師及醫生		産婆	藥劑師	醫師醫生一人に付人口
	官立	公立	總數	醫師			
臺北	5	6	1,781	1,403	1,534	133	2,886
新竹	1	1	360	355	281	47	2,755
臺中	1	1	329	244	298	7	3,098
臺南	2	2	349	281	277	3	3,136
高雄	2	4	453	400	593	25	2,741
臺東	1	3	363	202	290	6	2,979
花蓮港	1	1	333	333	290	2	2,849
澎湖	1	1	275	275	215	2	1,834
總數	24	28	17,811	14,031	15,344	133	2,886

醫生とは明治三十四年府令第四十七號臺灣醫生免許規則に依り免許を得て其の管轄内に於て醫師を業と爲す者を謂ふ。  
本表の外藥種商二千六百四十九名、製藥者二十名有り。

衛生上の調査機關

臺灣地方病及傳染病調査委員會

臺灣中央衛生會

檢疫機關

本島は對岸中華民國との交通極めて頻繁にして、加之何れの交通も必ず船舶に俟つを以て來航船舶の檢疫を施行するの急務なりし爲め、之に意を注ぎ海港檢疫、獸疫檢疫を行ひ傳染病豫防に特別の施設をなせり。

### 二 水道

本島に於ける既設水道(簡易水道を含む)の總數は陸軍省所管に係るパロン、玉里(但し玉里庄へ給水の分は表中に含む)、卑南及總督府所管の恒春種畜支所等の消費水量不明のものを除き昭和七年末には六十七箇所、其の給水専用栓戸數五萬六千五百四十六戸、共用栓戸數二萬七千八百九十六戸にして其の消費水量は不明のものを除き、計量供給千七百七十四萬立方尺、放任供給千三百七十六萬立方尺なり。

總數	年末現在		年中消費水量(千立方尺)	
	水道數	總數	計量供給	放任供給
總數	30	3,498	1,775	1,723
臺北州	3	1,026	915	111
新竹州	7	88	640	24
臺中州	2	64	213	43
臺南州	7	635	466	169
高雄州	7	565	539	26
臺東廳	3	78	90	38
花蓮港廳	9	573	453	30
澎湖廳	1	64	64	1
年中消費水量の臺東廳は臺東水道、花蓮港廳は花蓮港水道のみの事實なり。				

### 三 地方病

本島は一般に酷熱多雨にして不健康地の如く解せらるゝも近年衛生諸施設の完備と衛生思想の普及向上とに兩々相俟ち最近著しく面目を一新し、明治時代及び大正初年間暴威を逞ましようせしバストの如きも大正七年以來全く其の跡を絶ち發生を見ざるに至れり。次に

本島の代表的地方病マラリアは過去十數年間其の流行猖獗を極め死亡者多數に上りしが、大正二年本病防遏の根本的對策を樹立し、マラリア防遏規則を制定し、本病の濃厚地に對し防遏地域を指定し、原蟲保有者には強制服藥を命じ、一面地物の整理を講じ鋭意防遏に意を注ぎたる結果大正四年一萬三千三百五十人、即ち人口萬に付約四十人の多數死亡者を算せしが、同年以後は漸減し最近に於ては死亡者三千人内外人口萬に付約七人に激減せり。

又本島の地方病マラリアに亞ぎ死亡者の多きは法定傳染病たる腸チフスにして改隸以來遞増の傾向ありて今尙増加の趨勢を辿りつゝあり。本病の豫防に對しては其の計畫を一新し先づ檢疫機關の擴張と共に豫防施設の充實を圖り一面民衆の本病に對する關心と理解との啓發に力め其の滅滅を期しつゝあり。

年	死亡實數	指數	人口萬に付死亡
明治三九年	六六	一〇〇	三〇・三
同 四〇	六八	一〇〇	三〇・三
同 四一	九六	一〇〇	三〇・三
同 四二	八六	一〇〇	三〇・三
同 四三	九〇	一〇〇	三〇・三
同 四四	一三七	一〇〇	三〇・三
大正一	一八四	一〇〇	三〇・三

年	死亡實數	指數	人口萬に付死亡
同 二	一七七	一〇〇	三〇・三
同 三	一七六	一〇〇	三〇・三
同 四	一六一	一〇〇	三〇・三
同 五	二七九	一〇〇	三〇・三
同 六	二〇六	一〇〇	三〇・三
同 七	二二五	一〇〇	三〇・三
同 八	二三七	一〇〇	三〇・三
同 九	一六四	一〇〇	三〇・三
同 一〇	一八四	一〇〇	三〇・三
同 一一	一六〇	一〇〇	三〇・三
同 一二	一〇四	一〇〇	三〇・三
同 一三	一四〇	一〇〇	三〇・三
同 一四	九三	一〇〇	三〇・三
昭和一	一五〇	一〇〇	三〇・三
同 二	二二	一〇〇	三〇・三
同 三	二八三	一〇〇	三〇・三
同 四	二九二	一〇〇	三〇・三
同 五	三三三	一〇〇	三〇・三
同 六	二四三	一〇〇	三〇・三
同 七	二四三	一〇〇	三〇・三
同 八	二四三	一〇〇	三〇・三
同 九	二四三	一〇〇	三〇・三
同 一〇	二四三	一〇〇	三〇・三
同 一一	二四三	一〇〇	三〇・三
同 一二	二四三	一〇〇	三〇・三
同 一三	二四三	一〇〇	三〇・三
同 一四	二四三	一〇〇	三〇・三
同 一五	二四三	一〇〇	三〇・三
同 一六	二四三	一〇〇	三〇・三
同 一七	二四三	一〇〇	三〇・三
同 一八	二四三	一〇〇	三〇・三
同 一九	二四三	一〇〇	三〇・三
同 二〇	二四三	一〇〇	三〇・三
同 二一	二四三	一〇〇	三〇・三
同 二二	二四三	一〇〇	三〇・三
同 二三	二四三	一〇〇	三〇・三
同 二四	二四三	一〇〇	三〇・三
同 二五	二四三	一〇〇	三〇・三
同 二六	二四三	一〇〇	三〇・三
同 二七	二四三	一〇〇	三〇・三
同 二八	二四三	一〇〇	三〇・三
同 二九	二四三	一〇〇	三〇・三
同 三〇	二四三	一〇〇	三〇・三
同 三一	二四三	一〇〇	三〇・三
同 三二	二四三	一〇〇	三〇・三
同 三三	二四三	一〇〇	三〇・三
同 三四	二四三	一〇〇	三〇・三
同 三五	二四三	一〇〇	三〇・三
同 三六	二四三	一〇〇	三〇・三
同 三七	二四三	一〇〇	三〇・三
同 三八	二四三	一〇〇	三〇・三
同 三九	二四三	一〇〇	三〇・三
同 四〇	二四三	一〇〇	三〇・三
同 四一	二四三	一〇〇	三〇・三
同 四二	二四三	一〇〇	三〇・三
同 四三	二四三	一〇〇	三〇・三
同 四四	二四三	一〇〇	三〇・三
同 四五	二四三	一〇〇	三〇・三
同 四六	二四三	一〇〇	三〇・三
同 四七	二四三	一〇〇	三〇・三
同 四八	二四三	一〇〇	三〇・三
同 四九	二四三	一〇〇	三〇・三
同 五〇	二四三	一〇〇	三〇・三
同 五一	二四三	一〇〇	三〇・三
同 五二	二四三	一〇〇	三〇・三
同 五三	二四三	一〇〇	三〇・三
同 五四	二四三	一〇〇	三〇・三
同 五五	二四三	一〇〇	三〇・三
同 五六	二四三	一〇〇	三〇・三
同 五七	二四三	一〇〇	三〇・三
同 五八	二四三	一〇〇	三〇・三
同 五九	二四三	一〇〇	三〇・三
同 六〇	二四三	一〇〇	三〇・三
同 六一	二四三	一〇〇	三〇・三
同 六二	二四三	一〇〇	三〇・三
同 六三	二四三	一〇〇	三〇・三
同 六四	二四三	一〇〇	三〇・三
同 六五	二四三	一〇〇	三〇・三
同 六六	二四三	一〇〇	三〇・三
同 六七	二四三	一〇〇	三〇・三
同 六八	二四三	一〇〇	三〇・三
同 六九	二四三	一〇〇	三〇・三
同 七〇	二四三	一〇〇	三〇・三
同 七一	二四三	一〇〇	三〇・三
同 七二	二四三	一〇〇	三〇・三
同 七三	二四三	一〇〇	三〇・三
同 七四	二四三	一〇〇	三〇・三
同 七五	二四三	一〇〇	三〇・三
同 七六	二四三	一〇〇	三〇・三
同 七七	二四三	一〇〇	三〇・三
同 七八	二四三	一〇〇	三〇・三
同 七九	二四三	一〇〇	三〇・三
同 八〇	二四三	一〇〇	三〇・三
同 八一	二四三	一〇〇	三〇・三
同 八二	二四三	一〇〇	三〇・三
同 八三	二四三	一〇〇	三〇・三
同 八四	二四三	一〇〇	三〇・三
同 八五	二四三	一〇〇	三〇・三
同 八六	二四三	一〇〇	三〇・三
同 八七	二四三	一〇〇	三〇・三
同 八八	二四三	一〇〇	三〇・三
同 八九	二四三	一〇〇	三〇・三
同 九〇	二四三	一〇〇	三〇・三
同 九一	二四三	一〇〇	三〇・三
同 九二	二四三	一〇〇	三〇・三
同 九三	二四三	一〇〇	三〇・三
同 九四	二四三	一〇〇	三〇・三
同 九五	二四三	一〇〇	三〇・三
同 九六	二四三	一〇〇	三〇・三
同 九七	二四三	一〇〇	三〇・三
同 九八	二四三	一〇〇	三〇・三
同 九九	二四三	一〇〇	三〇・三
同 一〇〇	二四三	一〇〇	三〇・三



同

七

110%

三三三

三三

三

〇四三

六八九

四 阿 片

(イ) 阿片制度

阿片問題の解決は領事當時最も内外の注意を惹きしもの、一つなりしが政府は嚴禁主義を排し、漸禁主義を採用し其の所期の根絶を目して進めり。即ち明治二十九年二月政府以外への輸入を禁止し、同三十年一月阿片令の公布あり、更に同年三月阿片令施行規則を發布し以て所期の目的に邁進せるも土匪各地に出没して法令の普及も容易ならざる状態なりき。同三十三年九月辛ふじて全島の癮者十六萬九千六百四十四人を獲得吸食特許の鑑札を付與し、同三十五年吸食者の名簿を整理し、輸入、製造及密吸に對する取締を嚴にしたれば特許者及消費高も年々共に漸減しつつあり。

壽府阿片協定も昭和四年一月九日より效力を發生せんとし本島に於ても阿片斷禁の完成を確保せんが爲め昭和三年十二月阿片令を改正し同四年四月より實施せり。現下に於ては阿片に對する取締と其の害毒につきての認識を得るにつれ、政府の努力報ひられ癮者も漸次減少せり。此の狀勢を以て進まんか本島に阿片煙を見ざるの境に至るも近き將來なるべし。

臺灣總督府は阿片問題に就ては領事當時最も慎重なる態度を以て之に當り嚴禁主義を避けて漸禁の方針を執り、阿片癮者と認むる者に限り其の吸食を特許し、漸次之が絶滅を期し逐年豫期の目的を達成しつつあり。即ち之を最近二十二箇年間に就きて觀るに、特許者の數は大正元年の八萬七千人より昭和八年の一萬八千人即ち二割に減少せり。

(ロ) 阿片吸食特許者 (本島人)

年 末	總 數	男	女	指 數
大 正 一	八七,三七一	七五,九九九	一一,三三三	一〇〇
二	八二,三二八	七二,三八二	一〇,七四七	九三
三	七六,九九五	六六,八四〇	一〇,一五五	八八
四	七二,七二五	六二,二五六	九,五五九	八三
五	六八,八四七	五七,八二九	九,〇一八	七八
六	六三,三七七	五三,八三六	八,四七九	七三
七	五五,七七三	四八,二五八	七,六一四	六三
八	五三,〇三三	四四,八九〇	七,一三三	六〇
九	四八,〇三三	四一,三七五	六,六三七	五五
一〇	四四,九三三	三八,六八〇	六,二四二	五〇
一一	四二,一〇八	三六,二五七	五,八五一	四八



昭和	八	四	三	三	三	三	三	三	三
同	七	二	二	二	二	二	二	二	二
同	六	一	一	一	一	一	一	一	一
同	五	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
同	四	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
同	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
同	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
同	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
昭	八	三	三	三	三	三	三	三	三
和	七	二	二	二	二	二	二	二	二
	六	一	一	一	一	一	一	一	一
	五	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	四	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

二三 水利

本島に於ける埤圳数は六千七百七十八にして内、水利組合百七、公共埤圳二、認定外埤  
 圳六千六百六十九なり。其の灌漑排水面積は四十六萬三千甲にして内、其の五割は水利組  
 合の灌漑に屬す。

埤 圳 數

灌 漑 排 水 面 積

(昭和七年度末現在)  
 % (灌漑排水面積)

總	六七八	四六,七〇〇	一〇〇.〇
水利組合	一〇七	三三,四〇〇	五〇.五
公共埤圳	二	一三,六二六	二九.五
認定外埤圳	六六九	九三,〇六三	二〇.〇

二四 鐵 道

本島の鐵道は領臺當時僅かに基隆、新竹間六十二哩の線路ありしも其の施設不完全なるのみならず當時殆ど破壊され使用に堪へざるものなりしなり。領臺以來鐵道政策の基礎を確立し著々其の歩は進められ、縱貫線の全通を見、次で幾多分支線の開通となり、更に東部鐵道の全通となりて今日の盛況を見るに至れり。

昭和七年度末には官設鐵道(阿里山及羅東森林鐵道を含む)の營業秆數一千四秆に達し、外に私設鐵道二千二百八十二秆を有す。私設鐵道は主として製糖會社の經營する所にして内、營業線は五百三十一秆なり。

今之を内地其他と比較するに、面積千方秆に付鐵道營業線の秆數は關東州の三百二十八秆最も多く、内地の五十九秆、本島の四十三秆之に亞ぎ、樺太の十六秆最も少し。更に人口萬に付樺太の二十秆最も多く、朝鮮は二秆にして最も少く、本島は三秆を以て第四位に在り。

營業線路延長(秆)

朝 臺

鮮 灣

	總數	國有	地方	面積千方秆に付	人口萬に付
朝 臺	1,333	1,008	325	42.7	3.1
鮮 灣	428	322	106	19.4	2.2

樺太	五二	三三	二二	一六	一九
關東	一三	一	一三	三八	九三
内地	三、五七	一五、三三	七、九五	五九〇	三三

本表は昭和七年度末現在(内地の地方は六年度)にして拓務統計に依る。

### 二五 郵便、電信及電話

本島の逓信事業は軍政時代には總督府陸軍局に屬したりしが、明治二十九年四月より總督府民政局通信部の分掌となり、同三十四年十一月通信局の主管となり、大正八年に逓信局と改稱され、同十三年十二月獨立の官制に依り交通局内の逓信部となりて今日に及べり。

本島に於ける郵便、電信、電話の現況を觀るに、昭和七年度に於て通常郵便は引受七千二十萬、配達八千二百萬、電信は發信百五十七萬、著信百六十四萬、爲替は振出二千七百八十萬圓、拂渡千五百九十萬圓、貯金は預入一千七百九十萬圓、拂戻一千七百四十萬圓、現在高一千八百二十萬圓、振替貯金は口座受入及拂出各七千六百萬圓、現在七十二萬圓なり。

又同年度末現在に於ける電話は加入者數一萬五千百十、年度中加入者發信通話度數は七千九百四十萬なり。

今之を内地其他と比較するに、人口十に對する通常郵便引受、電報發信、爲替振出及貯金預入の割合は樺太最多數を示し朝鮮は最少數なり。

### (イ) 郵便、電信、爲替、貯金及電話

臺灣	朝鮮	關東	南洋	内地
一四三三	一三三二	六八九	八七三	六七七
三三	二八	二九〇	三三三	八一
五三三	四五五	四六一	三三四	六〇二
三六三	四〇五	二八五一	一八七四	一九三〇
一五、一〇〇	三四、八六九	五、一七三	三、二五五	七、一三六

通常郵便  
電信  
爲替  
預貯金  
電加入者

本表は拓務統計に依る。

電話

(口) 内地其他との比較 (昭和七年度)

人口十に對する

年度末現在	加入者數	年中加入者數	發信者數	加入人口	加入者數	加入者數
一五、一〇〇	七、九三六、二〇六	三、一	五、二五三			

通常郵便	電信	爲替	貯金	振替貯金
引配引	發人著發	振人拂振	預人現拂預	現口現口口
人口十に對する	人口十に對する	人口十に對する	人口十に對する	座座座
受連受	信信信	出渡出	入戻入	人員一に
七〇、一七六、六一三	一、五八五、八六九	二七、七四、三五七	一七、八九八、三六二	在付在出入
八二、九九二、九〇七	一、六三四、六〇九	一五、八七一、六八四	一七、四三三、七六七	
一四三三	三三二	五六三	一八、一四七、七六一	
			七六、二八四、九二五	
			七六、一六七、八二八	
			七二五、四三三	
			一五、一	

二六 職員及俸給

昭和八年末現在に於ける國庫及地方費支辨に係る本島の職員總數は三萬八千四百三十三人、是に對する俸給年額三千二百六十七萬四千七百九十七圓にして其の内譯を見るに勅任官四十七人三十一萬八千餘圓、委任官八百二人二百七十三萬五千餘圓、列任官一萬七百十六人千二百四十萬九千餘圓、吏員二千五百五十六人一百五十三萬六千餘圓、嘱託千二百二十三人八十四萬千餘圓、雇二萬二千五十九人一千四百四十二萬三千餘圓、傭千三十人四十一萬二千餘圓なり。

尙昭和七年末現在に於ける國庫支辨に係る職員及俸給年額を朝鮮其の他と比較すれば別表の如し。

(イ) 官職別人員及俸給 (昭和八年末現在)

國庫	人員		俸給年額
	人員	年額	
勅任	47	3,888,870	
委任	802	3,180,750	
列任	17,716	2,730,111	
吏員	2,556	1,515,980	
雇	22,599	14,442,300	
傭	30	4,120,000	
總計	24,120	35,878,011	

地方費	人員		俸給年額
	人員	年額	
總計	1,336	5,518,090	
勅任	2	5,518,090	
委任	1,334	1,536,106	
列任	1,334	2,922,560	
吏員	1,334	2,641,777	
雇	169	5,974,800	

委任待遇は列任に、列任待遇は雇に夫々算入せり傭は事務傭のみなり。

(ロ) 朝鮮其の他との比較 (昭和七年末現在)

總數	人員		俸給年額
	人員	年額	
臺灣	25,209	2,799,940	
朝鮮	7,333	3,335,860	
關東廳	1,294	2,922,560	
樺太廳	2,923	1,110,950	
南洋廳	759	1,110,950	
總計	37,528	11,270,260	

勅任	人員		俸給年額
	人員	年額	
臺灣	4	5,518,090	
朝鮮	100	5,518,090	
關東廳	9	5,518,090	
樺太廳	1	5,518,090	
南洋廳	1	5,518,090	
總計	115	27,580,360	

農畜林礦水工	耕種			總人口	大正元年	昭和七年	指數(大正元年を百とす)
	總畑田	外蕃	本内地				
產	數	人	人	人	三,四三三,一七〇	四,九二九,九六三	一四四
產	地(甲)	人(蕃地居住)	人	人	三,三二七,九三三	二,四八五,五八	一〇三
產		人	人	人	三,二二二,三三一	四,五四九,六三八	一四三
產		人	人	人	八一,三三七	八九,五八八	一一〇
產		人	人	人	一七,九二九	四三,二〇八	二三五
產		人	人	人	七二,二八二	八九,七三〇	一二八
產		人	人	人	三,四六,三七四	四三九,四六六	一二七
產		人	人	人	三,六四,九〇八	四〇〇,二六四	一一〇
產		人	人	人	七四,九一七,六一四	二四九,五一,四六〇圓	三三三
產		人	人	人	二五,六六八,七二四圓	二九,一九六,五八二圓	一一四
產		人	人	人	?	一〇,四五七,二七八圓	?
產		人	人	人	四,四八二,六一圓	一三,九五〇,八八九圓	三一一
產		人	人	人	二,二五〇,六八七圓	一四,四八九,六〇七圓	六四四
產		人	人	人	五,二〇二,八九五圓	二二,六〇二,七五七圓	四〇九

二七 最近二十一年間の趨勢概覽

奏任	判任	嘱託	雇員	備員
人員	人員	人員	人員	人員
俸給	俸給	俸給	俸給	俸給
八〇一	五,一六五	七,〇四〇,三五八	二,八〇六,八八	三,七〇六,三三
一,三七九	一,二八二	一,三六五,二三五	三,八〇六,八八	二,一〇三,〇六〇
三,八四六,二二七	五,八七	六,三八,一一八	三,七,三七四	二,六,二七九
一,八三	二,八六七	二,八六,一六六	三,二,四四〇	一,七五,二〇三
五九八,七四六	二〇七	七,一六〇	五,五,五八八	三,五,六八
一,八三	九四〇	一,三九二,〇九四	一,五,三,三三九	?
三,四二,三六〇	六,三,八七三	六,三,八七三	三,八五,五三二	??
一,五二,七三〇	三,六六	三,六六	三,八五,五三二	??

本表の俸給(加俸を含む)は國庫支辨のもののみを掲げ帝國統計年鑑に依る。俸給は年額にして單位圓なり。



糖 甘蔗收穫面積 七五,三九甲  
 製糖 二四九,三九九七九斤  
 貿易 一〇,五六,三〇七,三二斤(昭和八年期) 四三  
 總貿易 四〇,三三,七五八圓 三三  
 外貿易 四九,〇八六,〇七三圓 一〇  
 內貿易 三五六,一三九,六八五圓 三九一  
 財政 一二〇,三〇三,二七九圓 二〇〇  
 歲出 九七,二四〇,二九五圓 二〇六  
 歲入 六〇,二九五,八五八圓  
 專賣 四七,一八八,五七六圓  
 總賣 一七,〇九六,九二二圓 一九  
 阿片賣渡價額 三,二四四,七三三圓 五  
 食鹽賣渡價額 二,五三八,〇六四圓 三  
 樟腦及樟腦油 五,七九七,三〇七圓 ?  
 賣渡價額 四,五三三,八三四圓 三七  
 煙草賣渡價額 一四,七八八,七五八圓  
 酒賣渡價額 一三,五三三,四五七圓

二四九,三九九七九斤

一〇,五六,三〇七,三二斤(昭和八年期)

四三

三三,七五八圓

四〇,三三,七五八圓

三三

四九,〇八六,〇七三圓

四九,〇八六,〇七三圓

一〇

三五六,一三九,六八五圓

三五六,一三九,六八五圓

三九一

一二〇,三〇三,二七九圓

一二〇,三〇三,二七九圓

二〇〇

九七,二四〇,二九五圓

九七,二四〇,二九五圓

二〇六

一七,〇九六,九二二圓

一七,〇九六,九二二圓

一九

三,二四四,七三三圓

三,二四四,七三三圓

五

二,五三八,〇六四圓

二,五三八,〇六四圓

三

五,七九七,三〇七圓

五,七九七,三〇七圓

三七

四,五三三,八三四圓

四,五三三,八三四圓

三七

小學校兒童 八,九八〇 三七,七八六  
 公學校兒童 五,一五四〇 二八,一七四  
 中等學校生徒 一,〇〇七 一〇,四〇九  
 實業學校生徒 五八 三,〇〇九  
 實業補習學校生徒 二二〇 一,九八八  
 師範學校生徒 五三一 一,二二三  
 專門學校生徒 二二〇 八四四  
 高等學校生徒 一七五 五九五  
 大學學生 一七五 一七五  
 衛生 一五六 一九六  
 醫師及醫院 一,五九三 一,七〇八  
 藥劑師 四六 一,二三  
 產婆 一九九 一,五二四  
 鐵道 二,五八〇,三四圓 二,八三二,〇六圓  
 官設鐵道線路延長 三〇三哩 六四哩  
 運輸(乘客貨金) 二,二三五,八九四圓 七,七八,七五圓  
 收入(貨物貨金) 二,五四八,〇三四圓 二,八三二,〇六圓

八,九八〇

三七,七八六

四二

五,一五四〇

二八,一七四

四七

一,〇〇七

一〇,四〇九

一〇四

五八

三,〇〇九

五八

二二〇

一,九八八

一〇四

五三一

一,二二三

一〇四

二二〇

八四四

一〇四

一七五

五九五

一〇四

一五六

一九六

一〇四

一,五九三

一,七〇八

一〇七

四六

一,二三

一〇七

一九九

一,五二四

一〇七

二,五八〇,三四圓

二,八三二,〇六圓

二〇六

三〇三哩

六四哩

二〇六

二,二三五,八九四圓

七,七八,七五圓

三三

二,五四八,〇三四圓

二,八三二,〇六圓

三三

私設鐵道線路延長	郵便、電信及電話	通常郵便引受通數	電報發信通數	爲替振出金額	貯金預入金額	電話	振替	貯金	職員及俸給	高等官	判任官	其他	
八〇八哩	三〇,五七五,二一四	九〇三,三六二	一四,三九七,〇四五圓	三,一九六,三四三圓	三七五八	一七,六三四,六二〇	四,九五八,四五四圓	一〇七,〇六三圓	三五一	九三三,三九二圓	一,二八三,五	五,五〇一,五七一圓	二,六五四,六七六圓
一,四二八哩	七〇,一七六,六三三	一,五六五,八六九	二七,七七四,三五七圓	一七,八九八,三六二圓	一五,一一〇	七九,三七六,二〇六	七六,二八四,九二五圓	七五,四三三圓	九〇三	三,一四五,八七三圓	一,八七七,六	一八,三七七,三二六圓	一〇,六八二,〇六〇圓
一七五	三三〇	一七五	一九三	五六〇	四〇三	四〇〇	一,五三八	八七七	二五七	三三七	一四六	三三四	四〇二

附錄

附 録

一 帝國國富總額

昭和五年國勢調査の資料を主として利用し、内閣統計局に於て昭和五年末を選び國富調査を行ひしが其の結果に依れば昭和五年末國富總額は一千百一億八千八百萬圓内、官有一分二分、公有四分に對し私有は實に八割四分を占む。  
次に之を種類別に觀るに土地の四百十億九千百萬圓最も多く總額の三割七分を占め、建物の二百二十八億四千三百萬圓（二割一分）、家具家財の百二十四億七千三百萬圓（二割一分）等之に亞ぐ。  
尙之を世帯及び人口數に就きて觀るに一世帯當り八千六百七十二圓、人口一人當り千七百十圓なり。  
更に之を項目別及府縣別に掲ぐれば次の如し。

一 項 目 別		(單位百萬圓)			
總 項 目	總 額	官 有	公 有	私 有	
土 地	1,101,800,000	3,125,000,000	4,455,000,000	9,303,000,000	
建 物	2,284,400,000	3,125,000,000	1,442,000,000	3,653,000,000	
家 具 家 財	2,247,300,000	3,125,000,000	1,442,000,000	3,653,000,000	
總 計	5,633,500,000	9,375,000,000	7,339,000,000	16,711,000,000	

新	神	東	千	埼	群	栃	茨	福	山	秋	宮	岩	青	北	總	府
奈															海	
鴻	川	京	葉	玉	馬	木	城	島	形	田	城	手	森	道	額	縣
二,九三五	三,九二二	一,六八九	二,一九九	二,〇五五	一,七二〇	一,八七〇	二,三二一	一,九八七	一,六〇五	一,五七二	一,四九四	一,三〇八	一,二五六	五,八六八	一〇九,九九六	總額
		一,三六三	二,〇四	一,一九	二,〇六	一,五五	二,五七	一,七五	二,六五	一,五三	一,四六	二,五五	一,八六三	一,三七〇六	官有	
		三,九三	七三	八三	七四	五八	七六	六六	七二	六五	八七	五九	四九	四八	公有	
		二,四八一	一,九三	一,八五一	一,五〇二	一,六〇五	二,〇七六	一,六三三	一,五八	一,二四〇	一,二五三	一,一〇三	八五〇	三,五五三	九二,四三〇	私有

二府縣別 (單位百萬圓)

對外債權債務差額	雜	鑄貨及金銀地金	生	家	所	水	電	電	船	諸	鐵	工	建	家	樹	橋	港	鑛
一九一	二,二五〇	九一六	五,四五七	二,四七三	一,八四七	三五二	一九九	一九〇五	二,〇六〇	六六〇	三,五九八	一,八〇九	二,三八四三	三,四六	六,七〇六	四八三	三,四三	六,四九九
(一)二二七	二,〇五五	二八九	二八九	五四三	八三三	三	一九五	七六	一,〇四八	三,四六	二,五八五	一,四五	八八七	三三	二,一八	一〇	二,四七	四
(一)二〇三	一四			三三〇	三三〇	三四三		二二九	九	二七	二六		一,二三		五四三	四七二	九四	
六三三	一八一	九一六	五,二六八	二,六〇九	一,七六九四	六		一,六九九	一,〇〇一	二九六	七五四	一,六六四	二〇,七三三	三三三	四〇,四四		六,四九四	

山徳香愛高福佐長熊大宮鹿沖

(備考)

右府縣別國富推計額は昭和五年末各府縣境域内に現在したる物的財貨に就き其の總價額を表章したるものなり。(對外債權債務差額を除外す)

兒

口島川媛知岡賀崎本分崎島繩

二二三	八七八	八五六	一五七四	一一三〇	五,〇六〇	一一三〇	二,六〇八	一八六四	一四八二	一,〇六三	二,三三六	四四一
一五五	七〇	四七	四八	四六	七五	七七	一四三	六	一〇三	一四一	四	四
九〇	五七	四	三	三	一	三	三	八	五	三	三	三
一八八五	七八三	七三七	一四六四	九八八	四四五	一〇四三	一七六六	一六三三	一三五五	九二四	二,〇二一	四二一

富石福山長岐靜愛三滋京大兵奈和島鳥岡廣

歌

山川井梨野阜岡知重賀都阪庫良山取根山島

一,二七	一,三三	一,〇六三	八六八	三,三三	三,一〇	三,一〇	四,六三四	二,二九	一,三二	二,七四七	五,五三六	四,七八六	一,〇八三	二,三三七	七四八	一,三六	二,二二	三,五八七
五	七六	五	五	六三〇	一八五	三〇九	二六九	一六八	六八	四九	四九	三九八	四	四七	五	三	一六二	一,二〇八
八	七	五	三	二	一	九	八	三	三	二	二	一	五	四	三	六	二	一〇八
一〇,三六	一〇,六三	九五一	六八八	二,三三一	一,八四四	二,七九一	四,一七六	二,〇四七	一,〇八九	二,三三一	四,七九六	四,一九八	九八三	一,三三四	六五五	一,〇〇八	一,八三五	二,二七一

### 二 國債及借入金

昭和七年度末に於ける我が國の國債及借入金總額は八十一億九千萬圓にして人口一人當り八十五圓二十三錢三厘を示し、其の内譯は國債七十五億八千九百萬圓一人當り七十八圓九十七錢四厘、借入金六億百四十四萬圓一人當り六圓二十五錢九厘を各々算す。

次に内地及朝鮮其の他の國債及借入金並に人口一人當りの金額を示せば左の如し。

本表は帝國統計年鑑及拓務統計に依る。

(内地は本表以外に大藏省證券及米穀證券の三億二千三十六萬四千五百五十三圓あり)

(イ) 實 數 (單位圓)

總	内地	朝鮮	臺灣	樺州	關東	南洋
總數	100.0	92.7	5.3	1.5	0.4	0.1
總數	81,903,349	75,906,457	4,876,299	3,552,456	1,010,994	74,846
國債	75,886,337	70,541,952	3,737,217	2,873,040	9,857,338	74,846
借入金	6,017,112	5,364,505	1,139,082	679,416	125,256	—

六大洲別

總數	內地人	朝鮮人	
總數	男	女	
亞細亞洲	二,九四〇,〇〇〇	二,三〇〇,〇〇〇	男 二,二〇〇 女 一,五〇〇
歐洲	六四,七三三	四三,六四四	男 一,九四一 女 一,五三一
北亞米利加洲	二,四八八	九四五	男 一八 女 九
北亞米利加洲	七六,九一五	五〇,四五三	男 一八九 女 五
南亞米利加洲	八二,三五	六一,〇四四	男 六 女 五
阿弗利加洲	四三	二七	男 五 女 一
大洋洲	六八,九〇七	五五,九四九	男 五 女 一
西北比利亞	二,四八三	三〇七	男 一七九 女 六
中華民	二九,三八三	二五,〇〇八	男 一〇,五七 女 九六〇
滿洲	六八,五五四	六,二三四	男 五二四 女 四六七
英領香港	一,二四七	九七二	男 二六 女 七
暹羅	二,三三三	二七七	男 五四 女 五
佛領印度支那	四二四	二七七	男 五四 女 五
波領印度支那	七六〇	二七七	男 五四 女 五

三 海外在留本邦人

總數	國債	借入金
內地人	六,九七五	六三九
朝鮮人	一〇,三四四	七九〇
內地人	一八,二四三	二,八三三
朝鮮人	二四,〇八二	〇,六〇九
內地人	一〇,九六〇	二,五三四
朝鮮人	七,四三〇	〇,二〇〇
內地人	七,六三〇	一,〇〇〇
朝鮮人	〇,九五四	一,〇〇〇
總數	八五,三三三	一〇,〇〇〇





四 内地都市人口

昭和五年十月一日現在に於ける國勢調査の結果に依れば市の數は百九にして、市部の人口は一千五百四十四萬四千三百人にして總人口の二割四分を占む。百九市中人口十萬以上を有するもの二十八にして大阪の二百四十五萬餘人を首位とし、東京の二百七萬餘人、名古屋の九十萬餘人、神戸の七十八萬餘人、京都の七十六萬餘人及横濱の六十二萬餘人等順次之に亞ぐ。上記六大都市に亞ぐは廣島の二十七萬餘人にして其の外二十萬を越ゆるもの福岡、長崎の兩市あり、而して十萬以上は函館、吳、仙臺、札幌、八幡、熊本、金澤、小樽、岡山、鹿兒島、静岡、佐世保、新潟、堺、和歌山、横須賀、濱松、門司及川崎等の順序とす。

大阪市	二、四九三、五七三	函館市	一九七、三五三
東京市	二、〇七〇、九一三	仙台市	一九〇、二八三
名古屋市	九〇七、四〇四	札幌市	一六八、五七六
神戸市	七七八、六二六	八幡市	一六八、二二七
京都市	七六五、一四二	熊本市	一六四、四六〇
横濱市	六二〇、三〇六	金澤市	一五七、三二一
廣島市	二七〇、四二七	小樽市	一四四、八八七
福岡市	二三八、二八九	岡山市	一三九、二三三
長崎市	二〇四、六二六		

鹿 靜 佐 新 堺  
 兒 岡 世  
 島 保 瀧  
 市 市 市 市 市

一三七,三三六  
 一三六,四八一  
 一三三,二七四  
 一三五,二〇八  
 一三〇,三〇八

和 歌 山  
 須 賀  
 橫 松  
 濱 司  
 門 崎  
 川 市 市 市 市 市

一七,四四四  
 一一〇,三〇一  
 一〇九,四七八  
 一〇八,二三〇  
 一〇四,三五二



